



Title	文学部創立五十周年記念：忍頂寺文庫特輯
Author(s)	青田, 寿美; 内田, 宗一; 尾崎, 千佳 他
Citation	語文. 1998, 70, p. 3-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68925
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

文学部創立五十周年記念 忍頂寺文庫特輯

一、忍頂寺務氏及び忍頂寺文庫について

二、分野別文庫概説

三、忍頂寺と文庫点描

四、『淡路詞』翻刻・解題

五、忍頂寺務氏著述目録

執筆者 青田寿美（神戸女子大学専任講師）、内田宗一（本学大学院博士後期課程）、尾崎千佳（本学大学院博士後期課程）、

川端咲子（本学大学院博士後期課程）、近衛典子（昭和学院短期大学助教授）、富田志津子（本学助教）、

正木ゆみ（仏教大学非常勤講師）、驚原知良（相愛女子短期大学非常勤講師）、責任編集・福田安典（愛媛大学助教授）

一、忍頂寺務氏及び忍頂寺文庫について

世に蔵書家をもつて知られる方が多くおられるが、忍頂寺務氏をその列伝に加えることには異論がないであろう。

務氏は淡路島守、静村、静村閑人、宝山人とも号し、淡路津名町志筑の人、地元では「にんじょうじ」と濁って読む。忍頂寺家はこの志筑の名家であつて、『淡路草』に（句読点は筆者）、

村長忍頂寺某其先祖ハ藤原氏二條家の類族摂州島下郡忍頂寺村に蟄居し、いつの世にか其地を立去り、淡路八木御館に所縁在しにや寄食したりしが、細川滅亡の後津名郡竹谷村薬師に身をひそむ。今の薬師の小堂は是也。其後當村に來り、村長と成る。

とあり、『淡路国名所図会』に「寛永元年忍頂寺氏廣久建立する所と云」と記される忍頂寺氏建立の引摺寺や、菩提所にあつた十三重石塔も今に残っている。幕末から明治にかけて浪花で活躍した文人画家忍頂寺静村（梅谷）もこの一統である。務氏が静村という号を襲われるのもこの梅谷に憧憬されたことと思われるが、務氏は忍頂寺本家ではない。母の代に婿を取つて本家から分かれてゐる。務氏の曾祖父・広業は梁川星巖門の詩人で、頼三樹三郎、藤井竹外らと交流があり、彼らの書画尺牘が残されており、その数点は務氏自身で紹介されている。ただ気になることは、務氏は自ら静村号を愛されながら、梅谷について言及されることがなかったことである。曾祖父のことは書いても、梅谷のことには触れられていない。その詮索については本稿では為しえないけれども、務氏を理解する上で

留意すべきことであろう。

務氏は地元の洲本中学を卒業後、神戸の商社に勤務。洲本中学時代の逸話については、中村幸彦氏の紹介がある（『道聴塗説記』巻之二）。昭和二十六年十月四日、奈良の生駒で逝去された。享年六十六才、戒名は「真観院流芳静村居士」、静村の号を最後まで愛されていたようである。死に際して自ら告別の文章を製せられ、その通知文の写真がやはり中村氏によって紹介されている。墓は務氏が愛された故郷の淡路志筑にあり、まさに静村の名のごとく、陽だまり静かな小高い丘上に御令室とともに葬られている。

務氏の著述については、大正十三年三月「延寿清話」に書かれたのが最初であろうか。以後、大正期は「書物往来」「清元研究」「延寿清話」などに執筆された。この時期の集大成が著書「清元研究」（昭和五年、春陽堂）であることはよく知られている。昭和になつてからは、寄稿する雑誌が増え、「古本屋」「東京新誌」「慧星」「赤本屋」などにその名が見える。この時代に質・量ともに秀でた雑誌「上方」（南木芳太郎氏編集）には創刊号から寄稿、その創刊号の顔触れの中に藤井紫影氏・額原退蔵氏・藤田徳太郎氏・菅竹浦氏らの名が見えている。創刊号の編集後記には「神戸よりは清元研究の名著ある忍頂寺務氏」とある。晩年はおもに「陳書」「金曜」などに寄稿されていた。その他未定稿としては忍頂寺文庫と天理大学附属天理図書館（以下天理図書館）に数点が確認できたが今後の発見が待たれる。その著作の傾向としては、大きく注釈・考証・稀本紹介に分けられるが、それは務氏の著書「清元研究」が「清元註釋篇」と「清元研究篇」の構成をもつことから明らかにうかがうことのできる務氏の執筆態度である。

その交流関係はこの時期の愛書家や研究者を広く含み込んだものであった。前述の雑誌寄稿者との繋がり（例えば昭和五・六年、大曲駒村編「赤本屋」には「赤本屋連中」として飯島花月、永井荷風、宮武外骨などとともに務氏の名が列記）はもちろんだが、著述中にも交遊の人物を描写することも多い。中村幸彦氏とは淡路洲本中学の先輩後輩の関係にあり、氏を三田村鳶魚翁に紹介されたのも務氏である。その他特記すべきことは、高野辰之氏と菅竹浦氏、湯朝竹山人、三田村鳶魚氏、森銃三氏などとの好誼であろう。竹山人の「小唄研究」（大正十五年、アルス社）から務氏関係の記事を拾ってみると、

私へその消息（筆者注：阪神地方の芝派哥譚流行）をもたらされた人は、神戸の一貿易商忍頂寺務君である。（中略）同君は文獻考證に興味を有し、且つ清元の稽古の見臺に向つた経験もあるといふ。従つて阪神藝界の一消息通として認むべき人である。忍頂寺君とは、十月に初めて逢ひ

（大正十三年十二月）

一たび和尚を相識るに至つて、關西での俗中の俗地と思はれてゐる神戸から、而も貿易屋の和尚の机邊から、江戸聲曲文獻の披瀝を聞くことが、少しも不思議でないことを知りました。阪神に清元節を傳へた師匠の一人に、三代目清元順三があり、和尚は親しくその教へをうけたのであります。加ふるに和尚は金まうけを教授する商業學校の學生時代から、江戸軟派の文獻涉獵癖があつたのです。

（大正十四年八月）

とあつて、当時の務氏について知ることができる。また珍書保存会（大正六年六月創始）が五十集記念出版として『魚籃先生春遊記』を複製するが、その折りの会員名簿に大槻文彦氏・東京帝国大学・

南満州鉄道株式会社・芳賀矢一氏とともに務氏の名が見える。また東京牛込の市谷飯萬時代に石割松太郎氏から訪問を受けたことも懐かしく書かれている。意外なところでは、山口の毛利子爵家との交流もあり、本をめぐる幅広い交流関係があった。

その忍頂寺務氏が集められた蔵書の大部分が昭和二十九年三月に大阪大学に購入され、それが現忍頂寺文庫である。忍頂寺文庫の特徴は、叙上の務氏の為人がそのまま反映された文庫であるという一点に尽きよう。すなわち歌謡と小説をおもな柱とした奇書珍籍ということである。務氏本人によって保護表紙が施されたり、修復されている本が多くあり、務氏の本への愛情を看取することができる。

さらには、務氏特有の愛らしく丸まった字で書き込みがされている本も多くあり、その書き込みも貴重な資料となっている。その概要については本特輯各立項に譲るが、大切なことは近世文芸を説く際に当たり前のように名前が出される西鶴・近松・芭蕉・秋成・馬琴らの書物が全く無いが、あつたとしても数が少ないということである。その代りに、例えば大枝流芳の香書などがまとまって収められているが、この大枝流芳は若き都賀庭鐘が交流を持った人物である。つまり、上方に軸足を置きながら、西鶴や近松などの出てこない近世文芸が忍頂寺文庫の世界であり、明治から昭和までを生きた忍頂寺務氏というレンズを通して見た近世文芸の魅力ということになる。また一方では、歌謡と故郷・淡路に対しての想いも格別であり、それが文庫に彩りを添えている。漢籍類を例にとつてみれば、狂詩狂文を除けば圧倒的に明治期の淡路関係のものが多く、それ以外の物で江戸の雲如著『島雲漁唱』や、『論性説』『太極図』といったやや堅めの儒書、『姫路城隸郡二十四孝廉傳』などが見えるが、これも

『島雲漁唱』には雲如の淡路忍頂寺家訪問が記されており、『論性説』『太極図』『姫路城隸郡二十四孝廉傳』は木活字版といった具合に、いずれも淡路関係かまたは稀本であることが多く、務氏の性向をよく示している。但し、雲如に関しては、務氏自身が士崇との関係を書かれたこと（『陳書』第十二号）、雲如と交際のあつた紅蘭（梁川星巖の妻）について書かれていたこと（『上方』第一百号）がある。その他にも、『五山堂詩話』などは、清元の『梅の春』考証に及んで、毛利関係者を調べる際に参照されているもので、これもまた忍頂寺文庫に入れられてしかるべき書物である。

この忍頂寺文庫が大阪大学に入つてすでに四十年が経ち、やがて半世紀になる。その間に国文学研究資料館にマイクロが収められ、研究に供することができるようになったが、それとても文庫の全容ではない。その上に、購入当時に大阪大学附属図書館に勤務されていた、務氏とも交流のあつた歌謡研究家・山村太郎氏が作られた目録でさえも完備していないなど整備の遅れが指摘できる。務氏および文庫が年月と共に風化し、そのありようが人目に触れられないことは憂慮される事態であらう。本特輯を企画するゆえんである。

最後に、忍頂寺文庫はうまくまとまって大阪大学に入つたとはいえ、数点の流出が認められる。今後の忍頂寺文庫研究のために、務氏の代表的な蔵書印を掲げておく。この中で最も使用頻度が高いのは方形の「静村文庫」印である。

本特輯を為すにあたって、中村幸彦氏・肥田皓三氏・土田衛氏・石川真弘氏・大内初夫氏・現引撰寺御住職の田居義和氏から多くの御教示を頂いた。末筆ながら茲に感謝の辞を申し上げたい。また、かねてより忍頂寺文庫研究の重要性を説かれながら、昨夏に急逝された学兄・時松孝文

「静村文庫」



「淡路志筑荘忍頂寺文庫」



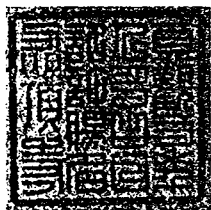
「淡路静村文庫」



「忍頂寺藏書章」



「貞觀貳年九月廿日詔許賜名忍頂寺」



氏の御霊前に本特輯を捧げたいと思う。尚、写真については坪崎光洋氏の手をわずらわせた。

〈福田〉

二、分野別文庫概説（以下、敬意表現はできるだけ略した）

【歌謡（一）浄瑠璃諸派・総記】

務は、その著書『清元研究』の「延寿清話」において、「上方もまた清元の半分を占有する権利があることを述べて見やう。」として、清元の源泉は京都出身の宮古路豊後掾が生み出した豊後節であること、そこから清元、富本、常磐津の三流が生まれた歴史を説き、豊後掾が都太夫一中の弟子であることにも触れている。彼は、以上のような浄瑠璃史観のもとに、清元節稽古本、宮園節正本、宮古節正本や段物集、一中節正本や段物集の収集につとめた。中でも、本文庫の一中節正本や段物集の貴重さはすでによく知られている。務は、清元節の源流として、一中節に対する強い関心を抱いたのである。湯朝竹山人も、一中節が清元節や幕末小唄に大きな影響力を持っていることを指摘しており（「清元節と小唄節との交渉」（上）

（下）『清元研究』第四号）、清元や小唄研究に一中節の存在を無視できないという共通認識が、当時の歌謡研究者の間に存したことがうかがえる。しかし、一中節を創始した初代都一中については、大正十一年の二百年忌に、それまで不明であった出自が明らかになったものの、動静については未だ不明な点が多く、その解明が急務とされた。そういった状況を鑑みて、務は、一中節の正本と段物集の発見に力を注ぎ、新出の一中節正本と段物集を精力的に紹介した（『陳書』第六、十、十三輯、『書物展望』第百四十四号）。そのよ

うな務の研究が、現在の初代都一中の研究の基礎となっている。天理図書館蔵務自筆稿本『近代歌謡考説』にも、これら一中節についての論文を冒頭に収録しており、一中節研究への務の思い入れを読み取ることができる。本文庫に、上方古浄瑠璃の名太夫山本角太夫の正本や段物集『呉竹集』（逸題。上田花月本による）（G26）が収められているのも、あるいは、一中節が角太夫節の系統を引くという認識に基づいていることであろうか。また、遊里歌謡集『音曲類伽鳥』（G70）『音曲源氏紫』（G71）（『音曲類伽鳥』の改題本）『色里迦陵頻』（G72）などは、浄瑠璃諸派の曲を多く集めたもので、稀書として知られる。務は、『陳書』第十輯「音曲びんがてう」において、『音曲類伽鳥』と改題本『音曲源氏紫』との曲の異同を検討し、そこから一中節の盛衰を考察している。

なお、務は江戸浄瑠璃河東節にも関心を寄せ、河東節の作者竹婦人呉丈の素姓について、しばしば考証している（『竹婦人呉丈に就て』『陳書』第十五輯など）。河東節正本「月見」（海五作）（G20・5）や「ますかがみ」（青車作）（G20・6）などは本文庫にのみ所蔵。

歌謡総記については、歌謡研究に関わる稿本類や注釈書が貴重である。務の自筆稿本『よしこの節』『どいつ節』（G109）の他、佐渡相川の漢詩人円山溟北の門人で、明治の中頃東京に鷗吟社を創立した大久保湘南の自筆稿本『佐渡俚謡註解』（G86）や、務と同郷の歌謡研究者小笠原久恒（弘化三〜昭和十二年）の自筆稿本『久恒翁採存』（G108）（全七十巻の内五巻）を収める。『久恒翁採存』は、久恒の死後務が全七十巻を譲り受け、敬意を込めて整理し、久恒の業績を広く世に伝えるべく、大部分を神戸市立図書館などの公共機

関に寄贈して、五巻のみ手元に残した。『賤が歌袋』（G106）（半紙本五冊、文政六年刊）は、播磨の医師であり、梅垣という俳名を持つ医者深澤菖庵による、俚謡、俗謡についての、戯作的要素も加味した興味深い注釈書。本文庫にのみ所蔵。

〈正木〉

【歌謡（二） 非劇場系音楽】

忍頂寺文庫には、務氏の自筆稿本が所収されている（G109）。『忍頂寺務』の柱刻がある清酒な特製原稿用紙に書かれ、自身が装丁したものである。内容は『よしこの節』と『どいつ節』で、成稿の後も推敲されたらしく上欄書き込みがある。務氏にかかる埋もれた著作があったことは注意されてよいであろう。『よしこの節』は、よしこの節を潮来節の変化とする『流行唄變遷史』（大正五年）を巻頭に『明治流行唄史』、『日本歌謡史』などを列記し、『守貞漫考』の記事と原歌を掲げている。以下、例証を挙げ、『まんさくよしこのふし』（和泉屋永吉板）の表紙・本文を掲げた後で「按、此よしこのは文政四年五年頃のものなるべし」とする。そして『しんぱんよしこのふし』（和泉屋永吉板）の表紙・本文を掲げて終わっている。小寺玉晃がまず唱えて、鳶魚らも指摘するように、よしこの節の作詞に清元が取り込まれることが多かった。当然務氏もそのことは承知であったはずだが本文には記載がない。忍頂寺文庫にはこの考証通りに潮来節からよしこの節にわたる多くの諸本が収められているが、気になることには務氏稿には見えない幕末から明治初期の上方よしこの節本が多いことである。これらは中本を三つに切った所謂三ツ切本で、一荷堂平水や山寿老といった作者・撰者のものも多く、長谷川貞信・西川祐春・歌川国員らの錦絵がある愛らしいも

のである。本屋として綿屋喜兵衛、本屋為助などの大阪書肆が多い。

氏が自身の考証に使うことのないこれらの本を収集したのは、「大別して、情歌（都々逸、よしこの）は、江戸では一般民衆に強く支持され、上方では趣味人が愛好する対象となった。したがって、美しい装幀の板行は次第に上方に活発化してくる」（西沢爽「日本近代歌謡史」といわれる上方よしこの本であるだけに、やはり氏も本としてこれらを愛玩し、上方趣味も加わっての収集であろうと思う。一般にこれらの小冊子はひどく傷んでいるものが多いが、務氏は一つ一つにアイロンをかけ、補綴しているのである。一方、『どどいつ節』はこの時期に湯朝竹山人や尾崎久弥が問題にしていた、どどいつの根源と都々一坊扇歌についての考証が主流をなしている。まず「俗曲評釋」（明治四十四年）から起筆し、「日本歌謡史」「江戸軟派研究」「歌謡雑考」を列記するところはこの時期の常套であろう。以下「瓦版の流行唄」や「上方」所収の諸論考を視野に入れたつ、松坂屋板とあづまや清吉板の扇歌作品の表紙・全文を掲げている。木村毅氏の「都々逸坊扇歌」の引用回数が多く、最後までこの著の引用で終わっている。ところが、従来「よしこの節」「どどいつ節」を説くもので意外にも務氏の名が見えない。例えば、同時代の藤田徳太郎著「近代歌謡の研究」（昭和十二年序文）では、湯朝竹山人や南木芳太郎の名を挙げるも務氏の名はなく、先引の西沢氏は注意すべきであろう。務氏がよしこの節について書き始めたのは氏の晩年であり、またよしこの節本には未整理のものが多いことから、よしこの節・どどいつ節は氏の晩年になってからの興味であったとみたい。氏がもう少し長生であればこの自筆稿本が世に出たの

ではないだろうか。

その他の非劇場系歌謡としては、くどき、瓦版、各地盆踊り唄、唱歌、琴曲、端唄などがあるが、これらのものの多くは生前に務氏によって分類された形跡はあるものの、そのまま封筒に雑然と入れられたままの状態で現在に至っているものも多い。その中で、兵庫節（くどき）については整理が進んでいる。また氏には「兵庫くどき」関係の論考がある。昭和六年、神戸を文化発信地とすべく、神戸陳書会が発足した。この会では務氏も清元についての講演を行い、発足時より深く関わっていた。その会誌「陳書」第一輯は會員のまさに鶴首待望するものであっただろう。そして、その創刊号を飾ったのが、兵庫ときや版と味噌屋版の兵庫節であった。もちろん、その解説は務氏で、簡単な兵庫節の概略が手際よく説かれている。兵庫節は享保頃に大阪兵庫を中心に流行した盆踊り唄であると考えられている。歌謡を愛し、郷土を愛した氏がこの兵庫節に惹かれていたのは当然のことであった。務氏のその関心を裏付けるように、忍頂寺文庫には兵庫節がかなりの点数で氏の解説のように大阪版・兵庫版、姫路版、広島版が集められている。またその観点から、各くどきと盆踊りおよびるびや節や道念節が集められている。ちなみに氏には心口説き全集の意図があつたようである（天理図書館に稿本現存）。

瓦版に関しては、仲の良かった三田村鳶魚氏が「瓦版の流行唄」を出され、瓦版への関心が一挙に高まっていた風潮があつた。そして、鳶魚氏の著書がそうであるように、瓦版と一括りにされているものの中でも、瓦版には分類しがたいものも認められる。ある程度の雑然さを覚悟しての収集である。

天理図書館に稿本『近代歌謡考説』がある。この書は昭和二十二年、まさにその四年後の死を予知したかのように氏が歌謡関係のものをまとめたもので、鳶魚から序までもらっている。その序に言う。現代に殆ど無くして、稀にも有らざるは大バカなり。供需関係から妙なものは高くても、無いものに相場はあるまい。ナンデー、ペランメエ、無價の珍物といふのは、茲を云ふんだぞ。我が知友先輩、勿論多くはない。憚りながら、たつた五六人、片手の指の寝て一疊、坐つて半疊、狭くはない全日本に、歌謡に関する知識に於いて此人々と肩を比べる者もあるまい。その人々の中に異彩を放つ忍頂寺君の博大精到、それこそ無價の珍物に紛れもない近代歌謡考説である。

それを承けて務氏、著者小言にいわく、

江戸時代の研究は、すればする程馬鹿になると云ふ。洒落本や細見、評判記などを澤山蒐めても、始終無言無説でさへあれば、文珠さんのように涼しい顔をしてゐられませう。然し持前の性分でさうは行かない。集めれば発表もしたくなる。曩に「清元研究」を出版して、たわけと云はれました。今度またこの「近代歌謡考説」を上梓して阿呆といはれませうか。

〈福田〉

【歌謡 (三) 御船歌】

忍頂寺文庫には、『尾州藩御船歌話』(G 139)、『明石藩御船歌』上
下 (G 145)、『姫路藩御船歌』(G 148)、『尾州家御船歌』(G 149)、『播州
明石浦御船歌』(G 150)、『蜂須賀家御船歌』(G 151)、『御船歌』(G 152)
『岡山藩御船歌』(G 153)、『赤穂郡坂越神社祭礼御船歌』(G 154)、『和

歌祭御船歌』(G 164)、『播磨きり御船歌』(G 166・1・2)の御船歌がある。この内、『尾州家御船歌』は謄写本、『蜂須賀家御船歌』、『岡山藩御船歌』、『和歌祭御船歌』は務による写本、『姫路藩御船歌』は川島禾舟による謄写本、『赤穂郡坂越神社祭礼御船歌』は同じく川島禾舟による写本である。この「御船歌」収集にあたつては、川島禾舟氏の厚意により、和歌山図書館所蔵の「御船歌」一冊を見る。

（『和歌祭御船歌』註）

この御船歌は赤穂郡坂越神社の祭礼に御輿が御旅所たる生島に着く前に唄ふものと云ふ。偶々謄写の便を得て一本を畏友忍頂寺氏の為に作成す
昭和十一年三月八日 川島右次 識

（『赤穂郡坂越神社祭礼御船歌』識語）

とあり、川島禾舟の協力がかなりあつたらしい。

「御船歌」はすでに明治四十五年刊の『近世文藝叢書』第十一巻に翻刻されているが、その研究の嚆矢は昭和四年の藤田徳太郎氏による「御船歌と木遣歌」（『近代歌謡集』所収）であろう。続いて昭和十二年「紀州文化研究」の『和歌祭御船歌』の翻刻、昭和十三年磯部貞雄氏の「尾張藩御船歌文献解題」（『典籍趣味』6、7、13）など。この「御船歌」研究が徐々になされ始めたとはほぼ同時期に、務による「御船歌」収集がなされている。『岡山藩御船歌』が昭和八年、『姫路藩御船歌』、『赤穂郡坂越神社祭礼御船歌』が昭和十一年、『和歌祭御船歌』が昭和二十一年に、務及び川島禾舟により写されているのである。

「御船歌」については『日本庶民文化資料集成』第五巻「歌謡」の解説に詳しいが、そこに次のような文がある。

御船歌においては、やはり幕府御船歌本を以て最高の權威とすべ

きは論を待たず、(中略) 諸般の御船歌を見るに、中には鳥取池田藩御船歌集や岡山藩御船歌等の如く、比較的郷土色の豊かなものもあるが、一般にその土地との結びつきが稀薄で、幕府御船歌の伝播という傾向が強い。

務もこうした傾向には気付いていたらしく、『岡山藩御船歌』の終わりに、『歌詞四十六番中 あけほの 和船 藤戸 高嶋まうて 高嶋 嶋里 の六は、全く郷土特有のものなり』という註を付けている。この「郷土特有のもの」に関心があつたのか、忍頂寺文庫へ集められ写された「御船歌」には基本形である幕府御船歌本は含まれていない。又、『赤穂郡坂越神社祭祀御船歌』『和歌祭御船歌』が含まれているのもそうした傾向の表れである。

『明石藩御船歌』(大本二冊)『播州明石浦御船歌』(大本一冊、元文四年十二月下旬写)は、『国書総目録』によると、忍頂寺文庫のみに存する本である。この二種の御船歌には、重なる唄が多いのであるが、ともに『日本庶民文化資料集成』の解説にある「郷土色のある曲」が多く含まれている。務の関心を如実に示す本であり、更に御船歌研究並びに俚謡研究の一助となる本である。 (川端)

【演劇】

『陳書』第七輯(昭和11・12)で務が、「役者の親玉、市川団十郎に關係の書物を、こゝ二十年余心がけて蒐集して居ます」(「八日目華」と述べるように、忍頂寺文庫には、市川団十郎家代々に関わる書が多い。以下、本文庫の団十郎關係の書について概観する。二代目に関しては、『もぐさうり』(G92-18)や『若緑勢曾我 外郎 売』(G92-19)などのせりふ本の他、俳諧を嗜んだ彼の八王子来遊

記念撰集『高尾土産』(D10)がある。本書には、四時観連衆の筆頭祇徳が、跋と賛を寄せる。二十二歳で早逝した三代目の追善句集『八日目華』(D4)は、五色紙を用い、見返しに金箔を散らした大本一冊。本文庫のみに所蔵。編者中村少長、松達斎旭波と三升(三代目)の句の他、二代目、三代目共に交流のあつた二世湖十を始めとする多くの俳人や、慶子、路考ら役者たちを含む七十人余りの句を載せる。本書について務は、「之は私の独り極めですが、珍書の一つかと思つて居ります」(前掲「八日目華」)と記す。また、大田南畝や立川焉馬ら文人との交遊があり、狂歌に長けていた五代目については、『江戸花海老』(南畝編)(C10)「狂歌友なし猿」(五代目編)(C55)「猿の毛衣」(旭眞葉雪編)(E5)がある。加えて、焉馬が編んだ所謂「白猿七部集」に相当する書(C27、C28、C29、E12、E13、E20、E21)が全て備わる。歌舞伎台帳『助六廓の花見時』(E35)は、六代目が二代目の二十三回忌に上演した時のものである。「七代目団十郎の配り本」(「書物展望」一巻四号)の中で、務は七代目を特に高く評価し、狂歌や発句にも秀でていた彼の配り本(諸国旅行記)について紹介している。そこで紹介された所謂「白猿三種」(C32、C33、C36)及び、「なゝゑびぞ」(C34)「遊行やまざる」(C35)が所蔵される。また、三十二歳で、大坂で自害を遂げた八代目追善の草双紙『夜雨眠玉草紙』(E14)「追善三升格子」(E15)他が所蔵される。このような、市川家代々に関わる書をできる限り網羅しようとする務の姿勢に、市川家への強い愛慕の念がうかがえよう。なお、以上の団十郎關係の書の中に、石割松太郎、関根只誠、永田有翠らの旧蔵本が見出せることを付記しておく。

團十郎以外の演劇関係の書にも目を転じると、役者評判記『芝居晴小袖』(E1)が、稀書として知られている。務は、本書に二代目團十郎関連の記事が多く見出せることに注目している(『典籍之研究』第四号)。本文庫にのみ所蔵される初代坂東三津五郎の追善黄表紙『蜀魂三津啼』(B41)においては、「大正元年十月集古会出陳」という務の書き入れの他、「笹舟文庫」の印記が注目される。同じく「笹舟文庫」の印記を持つ「開帳おどけ仮名手本忠臣蔵」(B43-1)は、袖岡や弁連ら浪花の俄師による「おどけ開帳」の趣向を取り入れた、『仮名手本忠臣蔵』などのパロディ。他に、唐本仕立ての劇書『梨園頼話』(E3)や写本の役者女房評判記『女意亭有嘶』(E33)などが稀書といえよう。

〔正木〕

【小説(散文類)】

元來私は江戸時代の音楽が好きですが(中略)江戸時代の音楽は斯様な譯で小唄と清元研究から入っていくのが順序ですが、研究としては其環境を忘れては成りませぬ。此等淨瑠璃や唄の出来た場所は、江戸町人生活の一部とも云ふ可き芝居と烟花の地でありますから、清元と小唄の研究は惹いて梨園柳巷の探訪を必要とします。また此方面から見た民衆經濟の調査も問題になります。と務氏は述べられ(『清元研究』著者小記)、これが氏の基本的収集姿勢であろう。つまり、洒落本や滑稽本から、人情本、細見、香道など一見多岐にわたるかのような収集ではあるが、小唄と清元の研究のための風俗資料として集められたのである。務氏の論考は注釈が一つの核をなしており、その考証に用いられたのがこれら散文類であり、それが文庫の散文類を構成しているとまずは理解してよい

であろう。

しかしながら、収集家の常として、その意識には無類の本への愛着、しかも稀本や珍本、美本の収集欲が底流にあることは当然で、文庫の全容を前引の言葉からだけで額面的に受け止めることはその本質を見誤ることになろう。また、『清元研究』以後に集められたものについては、単なる清元歌謡の注釈のためだけなのか、という問題もある。文庫全体を概観してみても、近年公刊された『洒落本大成』の底本に採用された稀本が数点ある上に、石塚豊芥子伝來の美本、『霞亭文庫』『洒竹文庫』『浜和助』などの印記を持つ逸品がある。さらには務氏自身も歌謡とは別に直接に洒落本に言及されることもあったし、『女鬼産』の挿絵画者・豊章(後の歌麿)について筆を執ることもあった。文庫の散文類は、前引の小唄や清元研究のための『梨園柳巷の探訪』のためだけに集められたのではなく、やはりそれ以上の務氏の性向、すなわち愛書家の食指的動くままに収集、賞玩された本たちであつたと思う。また、『月花余情』『陽台遺編』などの上方初期洒落本に逸品が多いのもこの文庫に彩りを添えている。加えて、桂井蒼八や西村定雅、耳鳥斎にも目配りがなされている。これらの上方物がそれなりに集められているのは、やはり務氏の性向の一つ、上方愛好のあらわれであろう。

〔福田〕

【狂歌】

狂歌関係の書は約五十点あるが、一瞥して気付くのは、追善集・遺稿集の類が多いことである。まず、江戸の天明狂歌壇では平秩東作・朱楽官江・鹿都部真顔・市川白猿ら錚々たる顔ぶれに対するものが揃っている。即ち、稀本として森銃三に紹介された折本『悼東

作翁夷曲歌』(C1)、菅江十三回忌追善『狂歌水無瀬の松風』(C65)、同百年忌『万世艸』(C48)、真顔の没年に編まれた『四方歌垣翁追善集』(C52)、及び一周忌追善『追福香花集』(C50)、白猿追善『数珠親玉』(C27)、瀬川仙女追善『露の淵』(C51)、十七歳で大坂に客死した大門喜和成を悼んで赤良・菅江・蔦重らが刊行した『いたみ諸白』(C3)などである。このうち『狂歌水無瀬の松風』には見返しに務の筆で「玖侶社記文庫本には題箋あり「たむけ久佐」と記されたるを見る(昭和四年二月古書保存趣味の会)」とあり、また菅江を描いた掛軸の写真が一葉挟み込まれている。写真は菅竹浦『近世狂歌史』所載のものと同じで、裏面には、竹浦が所蔵の葛飾北斎筆のこの軸を昭和七年に影写、務に贈る旨の記載がある。その図柄は本書の菅斎文邦筆肖像と酷似しており、二人の間で菅江肖像が話題となったことが窺える。この務の菅江肖像への関心は、「今迄見た中で最も気のきいた」(書物往来)6)洒落本という『雑文穿袋』冒頭の画像と関係があるのであろうか(『延寿清話』11、竹浦「狂名辨異」参照)。また「いたみ諸白」は務のために竹浦自らが原本の体裁さながらに筆写した一本であって、二人の書物を介しての心洗われるような雅交が偲ばれる。

上方に目を移せば、京都では九如館鈍永の七回忌追善『夷曲哥ねふつ』(C39)、同三十三回忌追善『興哥かひこの鳥』(C40)があり、大坂では永田貞柳の七回忌追善『狂歌餅月夜』(C58)、同五十回忌追善『狂歌いそちとり』(C43)、白縁斎梅好の父で貞柳高弟であった雪縁斎一好の十三回忌追善『狂歌帆かけ松』(C47)、貞柳・木端に学んで梁田蛭蛸とも交流のあった柏木遊泉の追悼『狂歌柳下艸』(C66)などがある。息、林端によって編まれた木端遺稿集

『狂歌栗置裏』(C41)、如栗亭栗洞の遺詠『狂歌夜光珠』(C22)も追悼の意を込めたものである。

これらの追悼・遺稿集に、祝賀の二点、市川海老蔵の襲名を祝う『江戸花海老』(C10)、永田貞峨(紀海音)法橋叙任記念『戎の鯛』(C45)をも加えると、狂歌関係書のほぼ三分の一を占める。このことは、赤良に代表される華麗な天明狂歌壇の作品集がほとんど見当たらないことも考え合わせれば、務の関心のあり様を如実に示しているように思われる。つまり、狂歌そのものを楽しむというよりも、狂歌師らの経歴・交友等の伝記資料としてこれらが収集されたと考えられるのである。

次なる特徴として、個人に対する関心で収集されたと思しき作品群の存在が挙げられよう。白猿への興味は「演劇」の頃に触れられる通り。ここでは白縁斎梅好・柏木遊泉への志向を指摘しておきたい。梅好は難波の狂歌師。その著作については多治比郁夫氏に論考が備わっているが、出版書肆を営み、狂歌集のほか難波名所案内など小冊ながら瀟洒な本造りをしている。彼への関心もまた、貞柳の門流に連なる父、兄、自身を称揚する彼の交友と、併せて上方の本への愛着に由来するところがあったのではないだろうか。柏木遊泉は明石の人。貞柳・木端門は先述の通りであるが、務の関心は何よりも遊泉が自らの縁者であることに発する。故郷淡路への尽きせぬ思いと同様、遙かなるゆかしい人々を追慕し、書物を通じての対話を試みたのであろう。

以上、狂歌関係の書物は点数はさほど多くはないものの、務の息吹の感じられる愛らしい文庫となっている。

〈近衛〉

【俳諧】

俳誌「ひむろ」昭和十一年二月号に、同誌選句人・高田蝶衣を追悼した、務の「蝶衣の幼きころ」が載る。務と蝶衣とは洲本中学同窓。この小文には、当時同校で教鞭を執っていた日本派俳人大谷繞石の影響下、「ホトトギス」に投句を試み、且つは「落ち栗」なる同人誌発刊にまで携わった務青年時の面影が語られているが、長じて後の俳歴は詳らかにし得ない。本文庫に蔵される俳書五六点中、淡路関連書が一特色を成しているのも、郷里の土壤が、その俳句との接点であった事情を伝えるものであらう。

淡路印行俳書の嚆矢と評される宝暦五年序『俳諧志都織』（D38）は、同国倭文庄莊田八幡宮奉納俳諧集、跋文に『淡路常磐草』編者・修竹蘆仲野安雄の名が見える。表紙見返に「仲墅家蔵」印があり、また「先般仲野安雄翁舊蔵の入札有之候節「俳諧志都織」購入致し候。同翁の跋文有之、郷土ものとして面白く存候」（「ひむろ」昭和十一年六月「消息」欄）との自身の言も備わって、収蔵の経緯は明白。同じ印記は宝暦五年序の白羽追善集『俳諧十六日』（D39）にも認められ、秋成初期資料としてこれを扱う俳諧史上の常識とは裏腹に、淡州俳人入集の方に興味の比重が置かれていたことを示唆している。嵐雪墓碑を小榎並村に建立した折の記念集、同六年序『一葉塚』（D32）に「一葉塚 洲本高校本による書名」とのメモ書が挟まれていることから、郷土俳書を渉猟した一面が垣間見られてくる。淡路出身の栗本二世玉屑編・寛政七年序『ちる花』（D6）、弘化元年序の名所発句集『続淡路島』（D36）の存在も付記しておく。

今一つ注目されるのは、演劇や小説との連絡に基づく収集である。

団十郎周辺の諸書については「演劇」の項に譲ることとし、ここでは、西村定雅の編著書が意識的に網羅されていることに触れたい。狂歌集では文化三年刊『古今馬鹿集』（C53・56）と文政七年刊『長唄馬鹿集』（C19）があり、洒落本・滑稽本の類として天明三年刊『徒然晝が川』（B3・本文庫収蔵分は寛政四年再板本）とその後編たる同五年刊『当世まゝの川』（B4）、また芝居楽屋を活写した享和四年刊『楽屋方言』（B7）がある。遊里戯場に取材する天明三年跋『仕方俳諧』（D95）や、花街語に題を求めた文化元年頃刊行の『外国通唱』（C15）の如き句集にも、俳諧という一領域に収まらない定雅の技量が発揮されており、翻って務の嗜好を窺わしめる作品と言えるだろう。

以上の諸点を勘案すれば、詰まるところ、俳諧の文芸性、あるいは俳諧史全般への務の関心は、さほど高いものではなかったということにもなるうか。『清元研究』研究篇第九章、「土人形の色娘」と題した小西来山遺愛の人形を巡る一文には、「来山の研究に付ては、宗因、鬼貫などの周囲の人々を閑却する訳には行かない」との言が見えるけれども、以下の記述が専ら、小西家末裔から大正五年に出された来山二百年忌記念の小冊子『虫の声』（D74）に依拠すると思しき点、それを裏書きする。が、そのことよって却って、俳諧という文芸の持つ地平の広がり、ここに豊かに提供されているのである。

（尾崎）

【吉原細見】

忍頂寺務には、吉原細見そのものを直接的に扱った論考が少ない。このことは、一見、吉原細見に対する彼の興味の薄さを物語るかの

ようである。しかし、務の著述全般を細かく見渡すと、彼が吉原細見の記述を、主に人物考証の材料として随所で活用していたことが確認できる。吉原細見は彼の研究を支える基礎資料の一つであったと言えよう。三田村鳶魚の日記には、昭和二年八月一日に「細見のしらべなど、馬鹿氣たことは、後來する者あるまじと思へど、忍頂寺氏を幸に暑いに御苦労なる仕事を勉む。」とあり、務が吉原細見に強い関心を示していたことが分かる（『三田村鳶魚全集』二七）。鳶魚の日記からは、務との間で吉原細見に限らず、書物を頻繁に貸借しあっていたことが確認でき、両者の深い交遊が窺われるが、忍頂寺文庫蔵の吉原細見中、寛政四年春「吉原細見」（F32）、寛政六年春「吉原細見」（F36）は鳶魚の旧蔵書である。また、中村幸彦は、務から「吉原細見の繙き方を教えら」れたというエピソードを述べている（『中村幸彦著述集』一五）。

忍頂寺務旧蔵の吉原細見のうち、忍頂寺文庫に所蔵されるものは全部で二五点にとどまる。その多くは、現在天理図書館に所蔵されており、丹羽謙治「天理図書館蔵遊女評判記・細見目録稿（上）」（『ヒブリア』一〇六、平成八年）によると、計二七点を数えるという。これらの吉原細見は、務が天理図書館に鳶魚旧蔵吉原細見の収蔵の便宜をはかった際に、自らの蔵書もあわせて寄贈したものである。その背景には、より多くの種類の吉原細見を一所に集めようという、務の意図があったのだと言われる（『中村幸彦著述集』一四）。事実、忍頂寺文庫に所蔵される吉原細見二五点のうち、二〇点までは天理図書館の蔵書と重複するものである。務が天理図書館と重複する細見のみを手元に残そうとした、その選別のあとが窺われる。

なお、忍頂寺務旧蔵の吉原細見は天理図書館のほか、現在までに国立国会図書館、東京大学教養学部図書館、東京都立中央図書館東京詰料でも所蔵が確認されている。これら天理図書館以外で所蔵される忍頂寺務旧蔵の吉原細見には、全て「楠林之章」という印記がある。ちなみに忍頂寺文庫蔵の吉原細見「新玉鏡」（F6）にも、同じ印が見られる。この「楠林之章」は、本郷の古書肆南陽堂の主人、楠林安三郎の印と目される。忍頂寺務旧蔵吉原細見の他文庫への流出の経緯を考える上で、重要な手がかりになると思われ、注目される。

〈内田〉

三、忍頂寺と文庫点描

◆忍頂寺（摂津・現大阪府茨木市 高野山真言宗） 摂津と丹波を結ぶ幹線街道・清阪峠丹波街道と諸道が交差するところにかつて威容を誇った忍頂寺があった。忍常寺、爾天宇路、ニテウジ、仁定寺などの異称はあるが、現在は忍頂寺（にんちょうじ）で通っている。忍頂寺の歴史は古い。『三代実録』貞観二年九月の項に「廿日丁卯。傳燈満位僧三澄奏言。神岑山寺在摂津国嶋下郡（中略）賜名忍頂寺。詔許之。」とあるように、僧三澄によって勅願寺として開かれた。やがて仁和寺の末寺として栄え、近辺の大門寺、大岩、銭原などの忍頂寺五ヶ村を中心とした寺領を持ち、南北朝期には重要な軍事拠点となる。織田信長の摂津平定の際に、一応の守護不入を安堵されるが、高山右近によって同寺は荒廃させられたと伝えられている。

『淡路草』が忍頂寺氏の先祖を藤原氏二條家と記するのは、あまりにも「ニジョウ」と「ニンジョウウジ」との語呂が合い過ぎてにわか

に信を置き難いが、忍頂寺氏がもはこの摂津の地出身であるとの説は認めてもよいと思われる。というのも、淡路に於ける忍頂寺家始祖・広久の移転時期がまさに信長らの進出によって忍頂寺が荒廃した時期と重なるからである。そして、務氏自身が「貞觀武年九月廿日詔許賜名忍頂寺」の印を用いているが、この印記が『三代実録』に拠っていることはあきらかで、氏も摂津忍頂寺を出身地と考えていたようである。

この説に立てば、忍頂寺には新たな問題が提示されてくる。忍頂寺は京との交流地にあり、ために『太平記』にもしばしば登場する地ではあるが、その地理的条件はそのまま文化交流の好立地条件でもあった。事実、『拾遺往生伝』に同寺の僧・源因の説話が採られていること、絶海中津が一時この地（銭原）に仮寓したこと、大門寺で壮絶な死を遂げた木村常陸介が『恨之介』成立に影響を与えたことなどが知られている。とすれば、淡路に移転前の忍頂寺にはいかなる文化土壌があったのだろうか、連歌・漢籍・芸能などの少しの嗜みはあり、それをそのまま淡路に持っていたのではないだろうか、という問題が提示されてくるわけである。忍頂寺家からは文人画家・梅谷・漢詩人・土崇、そして務氏が輩出されるが、この家から彼らが生まれることは偶然的所産なのであろうか。もし、中世からの書籍を伝えていたとしたならば、それらはどうなったのであるうか。また、少なくとも幕末の漢籍などはかなりの量を予想できるが、それらもどうなったのであろうか、といった問題が浮上してくるのである。務氏の淡路と一族へのこだわりを鑑みると、務氏にとって忍頂寺家とはいかなるものであったのかは今後考慮される必要がある。

〈福田〉

◆忍頂寺静村 名は温、字は知新・寿甫、通称は寿一、号は梅谷・静村。墓所は難波元町（現大阪市浪速区）の瑞龍寺（鉄眼寺）。安政三年刊『浪華名流記』は、文化二年（一八〇五）の生まれと記し、小原竹香撰の墓碑銘には、明治一〇年一月二六日に病没、享年七十四歳とある。生没年と年齢が一致しないが、およそその間の人。墓碑銘によると、静村は淡路の人で、幼時より絵画を嗜み、大坂に出て、初め上田公長の門に入り専ら写生画を学び、後に田能村竹田・貫名海屋に南画を学ぶ。大坂の堂島に住み、山水・人物・花鳥画をよくしたという。また、篠崎小竹の門人帖『麗沢簿』の天保三年の項に名が見える。（多治比郁夫校『篠崎小竹門人帖』、『大阪府立図書館紀要』第四号）当文庫所蔵の漢詩集『雲如山人第四集』（D51）には、「題梅谷生所画山水帖七首為土崇賦」という詩がある。詩人遠山雲如が忍頂寺務氏の曾祖父聴松を訪問した際の作である。当時、淡路の忍頂寺宗家は静村の画を少なからず所蔵していたのであろう。

〈銭原〉

◆忍頂寺聴松 名は広業、字は土崇、通称は弥太郎、後に仁三郎、別号は春洋・雲濤。文政七年（一八二四）生、明治三年（一八七〇）没。務の曾祖父。『麗沢簿』（同前）弘化元年の項に名があり、二十歳過ぎに篠崎小竹に入門したと見える。『陳書』第十四輯の務の記述によると、嘉永三年頃、同郷で三歳年上の伊藤聴秋（名は起雲、字は土龍、通称は介一、別号は黙成子・聴松）とともに京師に遊んだ。その折に梁川星巖の門下で詩を学び、同年代の頼三樹と親しく交流した。聴松・聴秋ともに、『近世名家詩鈔』（関重弘・藤田千歳編、万延二年刊）に五首の詩を採録されるが、いずれも三樹との贈

答詩を含む。また、両者は星巖の遺稿集『星巖詩存』（文久三年刊）巻八（聴秋は巻七も）の校訂を担当している。務が、三樹や星巖の妻の紅蘭のほか、藤井竹外、遠山雲如等の書簡を「陳書」や「上方」誌上に紹介し、『雲如山人第四集』（D51）等の書が当文庫に収められるのは、いずれもこの曾祖父の縁に関わるものである。〈驚原〉

◆忍頂寺務と三田村鳶魚 務の交友関係を語る上で看過し得ないのは三田村鳶魚の存在である。

久々に忍頂寺静村氏の家に投宿し、毎度ながら懇篤な世話を受け、全二日を款談に過す間に、天保以来の文人墨客の手紙を、沢山に見せて貰いました。それは皆曾祖父（仁三郎）の時代のものです……忍頂寺氏の家蔵に、星巖一巻の手紙の多いわけも、聴松が星巖の門人であつたと知れば、そのはずのことです。

（鳶魚「梁川星巖と絶縁」）

この鳶魚訪問は、彼の日記によれば、昭和一六年九月二五―二七日であつたらしい。務が諸雑誌上で紹介の筆を執っていた、曾祖父・聴松宛の雲如の書牘、紅蘭の手紙を披見した鳶魚は、「胸を拍つて感嘆」したという。また、聴松の曾孫である「静村氏を友とする私の快き」、その文人の血脈に対する憧憬の念を吐露している。

神戸に立ち寄つた鳶魚を務が奉迎するという関係は、溯つて昭和七年の日記記事にもみえる。六月七日、神戸港から満州旅行に立出する鳶魚は務・菅竹浦等に見送られ、七月一九日帰港。務の出迎えをうけた後、二〇日夜には「神戸陳書会小集」に出席している。この「小集」は、鳶魚の歓迎会を兼ねていたらしく、「是非来神せよ」と忍頂寺氏よりの電話」を受け「会場の普茶寮」に赴いた南木芳太

郎は、宴席の様子を次のように語っている（『萍水日誌』「上方」20）。神戸陳書会の歴々十三名、川島、菅、太田の諸氏に大阪より杉本梁江堂主参加す、会食の後各自持寄りの珍書回覧などし、さて江戸軟派の権威者たる鳶魚氏より満洲の話、朝鮮の水利組合の話など聴かされて、時代は躍動する哉の感がした。

務は、南木編集「上方」創刊号（昭6・1）以来、数度にわたつて原稿を寄せているが、同誌支持者団体「上方郷土研究会」への入会は創刊から丸九年の後と、遅い（「上方」110）。また、同研究会主催で講演会や史跡巡訪等の行事が毎月催され、逐次「上方」誌上に参加者名簿が掲載されているものの、管見の限り務の名は見出せなかった。「上方」とは或程度の距離をおいていたといえようか。一方、鳶魚「西鶴輪講の思い出」には、一定した輪講参加者中で「唯一の珍客」と務の参会が特記される。日記にも「西鶴輪講、忍頂寺氏同道」（昭23・10・16）などの記事がみえる。務・鳶魚が昵懇の仲であり互いに敬愛し合う間柄であつた理由として、近世文芸研究家にして愛書家たる性向が与つて大なる点、言を俟たない。〈青田〉

◆『笑本板古猫』（G249）『日本歌謡集成』第十一巻に翻刻されている潮来節の稀本である。『日本歌謡集成』の解説には、従来書名が判っていなかったが務が入手した本により書名が明らかになったこと、集成の底本はその忍頂寺本であることが書かれている。それまで書名が明らかではなかったことについては、務自身による『笑本板古猫』の保護表紙見返しにも「昭和三年六月十日入手 従来書名ヲ知ラレザル珍書也」と書かれている。

右記のように『日本歌謡集成』解説には忍頂寺蔵本である旨明記

されているにもかかわらず、『日本歌謡集成』の『笑本板古猫』と『小歌のちまた』（小寺玉晃の未刊本）に収められている「いたこぶし」との比較をしている藤田徳太郎の「いたこぶし覚え書」（『近代歌謡の研究』『近世流行歌考』）には、底本の所有者である務の名は挙げられていない。先に歌謡の解説で「よしこの節」を説くものに務の名が挙げられない傾向があると指摘されているが、ここでも同じことが言えるようである。

『笑本板古猫』そのものについては、『近代歌謡考説』「潮来節に就て 三、潮来の文献」（天理図書館蔵の未定稿）にある自身の解説を引用するのが一番よいかと思う。

中本一冊、紙数三十枚、行数八行にて、一枚に八章宛記し、総計二百三十五章（内二章不完全、一章重複）の潮来節を採録せるもので、序跋刊記を欠くも恐らく寛政度の出版なるべし。題名より推測すれば、巻頭に艶麗なる挿絵数枚ありしか、之を切り取りし刃物の形跡あるは誠に惜しむべし。（以下略）
（川端）

◆『梨園頼話』（E3） 小本一冊。刊本。安永三年跋。十三丁。全漢文。唐本仕立ての瀟洒な書である。刊本は、本文庫のみに所蔵。類原文庫に、本文庫本の透写本が存する。共表紙に付された保護表紙見返しに「貞観式年九月廿日詔許賜名忍頂寺」という務の印記と、「此書『南水漫遊』続篇二の巻に、「一種梨園頼話」として安永三年の雑評あり」と記して全文を収録せり、又「脚色余録」三篇上の巻には、此書の口画を模写せり。」という務による書き入れがある。『脚色余録』には、「口絵出入の湊新町の図おかしければ写して爰に記す物也」と記す。この記述を手掛かりに今回調査したところ、本書

扉絵は、寛保三年一月大坂姉川座歌舞伎『黒船一世一代男』の絵尽しの挿絵を直接の粉本として唐風に仕立てていることが判明した。

本書の首題には「浪華幹旋子」、内題下には「傾軋逸人」、跋文に「北窓散人」という名が見え、いずれも戯号と思われるが、詳細は不明。標題では、明和期に、主に京坂で活躍した三十六人の役者の俳名の下に、その役者の芸風を景物などに見立てた二字の漢語を置き（慶子湖柳、「梅幸雪梅」など）、目録とする。本文では、その題に沿って、短い役者評を記す。このような発想は、「蒙求」を想起させるが、直接的には安永二年刊の銅脈先生の狂詩集『吹寄蒙求』の影響を見るべきかと考える。『吹寄蒙求』にも「鯉長構而雷子本哉」の如く、役者の俳名を上冠した題が見出せるからである。また、役者の芸風を何かに見立てる趣向は、当時の役者評判記の目録における見立ての趣向と通じるものといえよう。本文冒頭や跋文は、従来の役者評を批判し、本書の役者評のあり方の公正なることを表明した興味深い戯文となっている。明和九年刊の青田立見の狂詩集『戯場編』の跋文にも、評判のあり方について触れた箇所がある。唐本仕立てという体裁も含め、本書は『戯場篇』や『吹寄蒙求』といった芝居を主な題材にした狂詩集の流れの中で位置づけられる劇書といえよう。
（正木）

◆『音曲大黒煎餅』（G246） 小本六冊。各本外題は、「音曲大黒煎餅初編」「音曲大黒煎餅二編」……とある。版元記載はない。表紙と見返しに絵に薄色の彩色が施された美しい装丁である。『国書総目録』によると、『音曲大黒煎餅』とある本は、東京都立中央図書館に二編が一冊、狩野文庫に初・二編が四冊所蔵されているが、六

冊が同一所に所蔵されているのは忍頂寺文庫のみである。

ところで、東京都立中央図書館東京誌料室にこの『音曲大黒煎餅』に似た題の『大黒せんべいはうた』という本が所蔵されている。同じく小本で一冊、外題は『大黒せんべいはうた』、内題はない。丁数は十丁である。詳しく調査をしたところ、この本の七丁目から十丁目までが『音曲大黒煎餅』初編の十二丁目から最終丁までと同版、五・六丁目が『音曲大黒煎餅』三編の九・十丁目と同版、四丁目が『音曲大黒煎餅』六編三丁目と同版で、いずれも丁付けまで同じであった。ただし、『大黒せんべいはうた』一丁目から三丁目と同版部分は『音曲大黒煎餅』六冊にはない。つまり、三丁目までをのぞくと『大黒せんべいはうた』はすべて『音曲大黒煎餅』を利用して作られているわけである。とすれば、『大黒せんべいはうた』の一から三丁目に該当する『音曲大黒煎餅』もあつたことが推測される。六冊で揃っていると思われていた『音曲大黒煎餅』は、さらにもう一、二冊あるのが本来の形ではなからうか。

〈川端〉

◆『粹好伝夢枕』（A139） 中本一冊。写本。夙に『洒落本大系』『洒落本大成』に翻刻されるが、すべてこの本に拠る。自序末に「文政十二のとし 華月 市中庵」とあつて、成立、作者のおおよそがわかるが、作者については未詳。また、画者の東朔坊も未詳。洒落本の逸品が多い中で、この作品を取り上げたのは、一には稿本の洒落本という珍しさ、また彩色を施した可憐な造本がいかにも務氏の性向に合うものであるからである。しかし、もう一つには、本書は神戸湊川の遊所に触れたものであるが、湊川の洒落本自体が珍しいことによる。務氏は上方及び淡路に愛着を持っておられたが、

その務氏が神戸の遊廓について言及したものがあり、この書にも触れている。この愛らしい神戸の洒落本が、幾人かの好文家を移り渡りながらも、務氏の手元に行き着いたことは、まさに適宜な落ち着き処を心得ていたと言えよう。

〈福田〉

◆吉原細見「とらがふみ」（F7） 延享三年春刊。横小本一冊。本書の詳細な書誌は八木敬一・丹羽謙治編『吉原細見年表』（日本書誌学大系七二）で紹介されており、参照されたい。本書は式亭三馬の旧蔵で、題簽と序一オに「式亭」の印、裏表紙見返しに「文化十とせといふとしの閏霜月なかは表装をおきなひつ」という三馬自筆の識語と「三馬」の印が存する。三馬の旧蔵書に識語や改装の例が多いことは諸先学の指摘するところだが、朝倉治彦は特に文化一〇年前後の識語が多い点を指摘している（『三馬の識語』、『典籍』七、昭和二八年）。現在、三馬の旧蔵書は散佚しているため全容は窺い知れないものの、三馬旧蔵の吉原細見中、岩瀬文庫蔵「兩巴危言」には文化一〇年一月に改装との識語が、國學院大學図書館甘露堂文庫蔵延享四年秋「吉原細見」及び岩瀬文庫蔵「婦多美賀多」には、「とらがふみ」と同じく文化一〇年閏一月に改装を施したとの識語が、それぞれ確認されている。三馬が、この時期に吉原細見の改装をまとめて行っていたことが窺える。

また、本書の表紙見返しには「此細見「とらが文」と題するか、奇書珍籍第三号に東華氏の説明あり」という、務の書き入れも存する。「東華氏の説明」とは、堀江東華の「吉原細見年表」（『奇書珍籍』三、大正九年）を指す。務は「書物往来」一〇（大正一四年）に「吉原細見記」と題する論考を寄せ、この「細見年表に対する些

かの補遺」として、先の年表で不明とされていた点を補足するとともに、年表に漏れていた吉原細見を新たに八点紹介している。(内田)

◆『俳諧拾玉集』(F42) 半紙本一冊。東義編、寛政元年良山跋。

同六年序の遊里諸札指南書『男女不婧形』紙背に貼付されたものである。『男女不婧形』の方は中本一冊。両書ともに板元記載を持たず、その相關関係は詳らかでない。『俳諧拾玉集』の版心丁付は「三十四」に始まり、「四十」丁目が跋文。次いで「一」(叙)、「八」丁目まで続き、都合二十六丁が失われたものと見られる。『男女不婧形』紙数に合わせるべく、首尾数丁ずつを利用した結果であろうか。

本書は、筑後住の編者が同地の高良山十景詠句を玉垂宮に奉納した折の記念撰集で、従来、杉浦正一郎旧蔵の一本が知られるのみであった(現綿屋文庫蔵、「わ179-80」)。「男女不婧形」の方も、他所蔵を聞かない。零本ながら、上の如き地方俳書が色里関連書と抱き合わせられる形で伝来している現象は、注意されてよいだろう。両書刊年は近接しているから、捌きの捗々しからぬ地方俳書を裏打紙に再利用した、書肆の所為が想像されもしようが、化粧断の施されないままの形を留めている点に疑問を残す。あるいは、『男女不婧形』を珍重する旧蔵者の仕業であったか。ともかくも、地方俳書の伝播と当代価値について、示唆を与える現象ではあろう。(尾崎)

◆『姫路城隼郡二十四孝廉伝』(D89) 中本一冊。木活字本。十二

字五行二十六丁。白鷺舎主人著。末尾に「寛政十二年夏四月立稿、享和改元春三月本藩活字刷印」とある。姫路藩に賞彰された忠孝廉

潔の士二十四名の事績を漢文体で綴ったもの。『国書総目録』の所蔵記載は、当文庫と姫路市立図書館の二本のみ。本書については、夙に「陳書」第四輯(昭和九年二月)に、神戸陳書会会員の川島右次蔵本として、同会会員の太田陸郎により翻刻解題がなされており、当時既に稀覯本であったという。務もまた陳書会の同人であるから、当文庫の蔵本は何らかの契機により川島から務の手に渡ったものである可能性が高い。なお、『近世木活・青裳堂書店古書目録』には、「陳書」掲載の影印を収める。

著者の白鷺舎主人とは、三代姫路藩主酒井忠道(安永五-天保八)の号である。忠道は幼時より学を好み、折衷派の儒者関修齡に就いて学んだ。博く和漢の学に通じて、藩内に究学の風を廣したという。本書は藩饗好古堂内の姫藩木活所より版行されたもの。また、忠道の代の家老河合寸翁の開設した仁寿山饗より天保三年に上梓された木活字本、『論性説』・『太極図』も当文庫に収められている。(鷺原)

◆『懷沙篇』(H66) 明治四四年一月一日、大阪の蔵書家として名を馳せた濱和助が纂じた。その一周忌追悼文集として上梓されたのが『懷沙篇』である。和装本一冊。柱刻「濱氏蔵」、最終丁裏の欄外に「磯野刻」とある。和助翁遺愛の用箋を用い、磯野秋渚が二〇余名各氏の自筆による版下を刻したものの。題箋は、「懷沙篇 内藤虎署」とあり、内藤湖南の筆になる。「懷沙」の題字は、翁が真砂と号したことに因んでいよう。これら本造りの随所に、翁哀悼の衷心が看取される。

和助は、質業を営む傍ら「汎く古典古文書を蒐集して之を愛読し能く史蹟傳系等に精通し博通の稱ありて好古家を以て其名世に聞」

え(石田誠太郎『大阪人物誌』)、在野の愛書家の最たる存在であった。と同時に、湖南内藤虎次郎や幸田成友といった、学者畑の稀書珍籍蒐集家とも浅からぬ交流のあったことが、本書によって知れる。「精励業を勤め儉素身を奉じ」「夙二読書の興趣を解し平常好んで書冊を手ニす」る和助のもとへ「好古耽奇の癖有る者」が集ったと、翁在りし日の思い出が成友によって綴られている。濱和助という一商人の蒐書癖或いは好古趣味と連動する形で、愛書家ネットワーク——本書はまさにその縮図といえる。また、和助の為人・交流関係のありようは、務のそれともオーバーラップしてこよう。

以下、和助をめぐる上方の愛書家たちの動向を窺ってみたい。

本書の執筆者には、先述した湖南・成友の他に、小間物問屋の主人で俳人でもあった露石水落庄兵衛、鴻池家と縁故の深い有閑の士人有翠永田好三郎、大阪朝日新聞の記者にして近世文学研究家の好尚木崎愛吉、小山源治といった関西きつての蔵書家が名を連ねている。劇作家月郊高安三郎、漢詩人秋渚磯野が菟介、根岸派歌人比露思花田大五郎、新聞記者としても活躍し大阪における文学運動の中心となった天因西村時彦や南翠須藤光暉・素川鳥居赫雄らの名もみえる。特筆すべきは、松雲堂二代目店主鹿田静七が、餘霞の号で一首を寄せていることである。同店発行「書籍月報」(後、「古典聚目」と改題)にまつわるエピソードから引用する。

古本は一部切である。註文の前後によつて勝負が決するのであるから、勢ひ同店に駆付けざるを得ない。同じ思で濱和助、永田好三郎、水落露石、打越竹三郎、水谷不倒、内藤湖南、磯野秋渚等の先輩知己諸氏が松雲堂の二階南向の小座敷へ続々として詰掛け。(幸田成友「初代鹿田静七氏と書籍月報」)

松雲堂に参会した人々によつて古書交換会が催され、第一回(明37)には、和助をはじめ古井初代静七や成友・露石・湖南・有翠、さらには桃華富岡謙蔵・水谷不倒といった名だたる蔵書家が参加している。「此の交換会が、数年間続く間に大阪の愛書熱は、いよく以て沸騰した」(高梨光司「明治時代の大阪の愛書家」「書物趣味」24)という。「懷沙篇」執筆者の中では、第一回交換会列席の諸氏に加え、加賀翠溪・南翠・好尚・月郊の顔ぶれもみえる。「すべて此の一群は松雲堂を中心として活動したりしなり」(「古典聚目」第一〇〇号記念巻頭言)と、湖南が在阪當時を懐古したような松雲堂の活況、その中で古老と仰がれた存在が真砂濱和助翁であった。

後年、務は、「懷沙篇」編者と目される好尚と書簡の往復をし(「陳書」14)、松雲堂を訪れて古書を購入していたが(湯朝竹山人「関西吟遊隨筆三稿」「書物往来」13)、和助との交誼如何は詳らかでない。おそらく、務・菅竹浦・川島禾舟・太田陸郎ら神戸陳書会の愛書家連は、松雲堂に集う愛書家のネットワークに属していなかったものと思われる。とはいえ、務が本書を入手した背景に、在野の愛書家・和助への追慕の念を読み取ることは困難でない。(青田)

◆蔵書印について(1) 忍頂寺文庫には文庫主務の蔵書印の他、同一旧蔵者の印記が複数みられる。押印数が多いのは、黒崎貞枝(「玖侶社記」、永田有翠(「永田文庫」「なかつた」、関根只誠(「只誠蔵」「此ぬし七米」、大久保紫香(「紫香蔵」「游戲三昧院」、三宅吉之助(「宇津保文庫」、渡辺霞亭(「霞亭文庫」、石割松太郎(「石割蔵」)で、いずれも五点以上の押印がある。これら旧蔵者に関して若干の説明を加え、本文庫との関連を考察する。

① 関根只誠旧蔵印 『大抵御覧』(A 29) 『美満寿組入』(C 29) 『遠く見ます』(C 33) 『助六廊の花見時』(E 35) 『新吉原細見』(F 11) 『女郎花』(F 12) 『諸国色里備帳独案内』(F 24) に押印されている。軟派物の蒐集家として著名であった只誠は明治二十六年の歿。務が只誠著『名人忌辰録』(明 27) の誤謬を指摘したところ、長子正直から返信があったこと(竹浦楼主人「書無きに如かずの歎」「書物往来」17)、また、演劇通として知られる次男の黙庵が明治末の一〇年間在阪していたことから、関根家との書物をめぐる交流があった可能性も考えられる。関根文庫本に務の蔵書印が存するならば、如上の推測を裏付けることができる。

只誠・正直の「旧蔵目録」という「関根文庫目録」に記載の蔵書印記(「…等の蔵印」と省略もあり)中には、務の蔵書印は見出せなかった。同目録「解説」(関根俊雄)によると、関根文庫本は、大正八、九年頃軟派物と名家自筆書類等が松廼舎文庫に収められたが、関東大震災で焼失。関根旧蔵書が現在纏まった形でみられるのは、終戦前後明治大学図書館に収蔵されたという書冊のみ。ただし「関根文庫目録」に「一四七部明大図書館へ」と記された有職故実関係書の内、同館現蔵であることを確認できたのは約八〇部で、やはり務の蔵書印は皆無であった。

只誠没後その「筆写本及び洒落本・芝居関係書類を残した外、板本の大部分は売却されたと聞いてをる。爾来只誠蔵印が古書界の注目を惹くやうになつた」(水谷不倒「福田文庫と只誠蔵本」)ようで、「只誠蔵の蔵印ある本は今日世界中にある」(小池藤五郎談、前掲「解説」ともいう。只誠旧蔵印を有する古書は少なからず書肆に回つたと考えてよい。忍頂寺文庫の七点もその内のものか。

② 渡辺霞亭旧蔵印 『当世導通記』(A 110) 『傾城百人一首』(B 46) 『新板正説柴屋通』(E 11・2) 『七福神伝記』(H 50) 『懷沙篇』(H 66) にみえる。「東京大学総合図書館 霞亭文庫目録」に記載された旧蔵印を瞥見し、同目録中省略分の印記に関して調査確認した限りでは、務の蔵書印は見出せなかった。東大図書館蔵霞亭文庫は、近世の小説・演劇書を中心としたコレクションで、霞亭没年の大正一五年に同館が購入。全一一五九点の内、押印数の多い旧蔵者名とその印記をあげ、霞亭文庫蔵本の伝来をみておく。

幸田露伴の「有水可漁」印四〇余点をはじめ、「永田文庫」印、林忠正の印記三種、斎藤雀志の「斎藤文庫」印、「濱和助」印が各二〇点以上みられた。他にも、松雲堂主人鹿田静七の印記や、松雲堂の顧客、幸田成友・中井浩水・水谷不倒の印記が確認でき、注目される。大阪朝日新聞記者であった霞亭は、小説家・劇評家としても健筆を揮い、後半生を大阪の地で過ごした。霞亭と共に文芸誌「なにはがた」を刊行した浪華文学会同人には、「懷沙篇」執筆者の西村天因・木崎好尚・磯野秋渚がいる。また、霞亭自らが語るように、有翠と「随分旧い知己で」その蔵印のある「手沢本」を「沢山」所持している(「下萌」6「有翠氏追悼号」)など、霞亭の蒐集上の人脉を、松雲堂・古書交換会との繋がりに窺うこともできよう。霞亭の旧蔵書は、東大図書館に入った以外、昭和二年六月に売立が行われた。大阪鹿田・だるまや、京都細川、東京村口の四書店が札元となり、総点数一四〇〇〇五〇〇点、総冊数約五〇〇〇冊で、「未曾有のもの」であったという(反町茂雄「大阪第一の蒐集家、渡辺霞亭」)。鹿田松雲堂に集う愛書家サークルと、務の属したそれとが異なる点から、忍頂寺文庫の霞亭旧蔵書は、売立会や古書肆を

通じての購入であったと考えられる。

③ 黒崎貞枝旧蔵印・他 忍頂寺文庫本に捺されている旧蔵者の印記中、最も多いのは「玖侶社記」印である(管見の限り一〇点を確認)。江戸板本の雑本類蒐集家であった黒崎貞枝は、「上方」の寄稿者で(実名或いは「玖侶社記文庫主人」の号)、かつ務と縁故の深い雑誌「東京新誌」「書物往来」の改題誌の年間購読者でもある。務による家蔵本への書込「玖侶社記文庫本には……」を勘案すれば、両者の交誼は想定しやすい。また、務は、石割松太郎が来訪した際に、歌謡の話をして家蔵の唄本数冊をみせたという(「法花歌だいが」「上方」10)。黒崎・石割同様、永田有翠・大久保紫香・三宅吉之助も、明治・大正期における有数の蔵書家である。このうち、永田文庫本は大正一一、一三年の二回にわたる大売立があり、務は「此度永田本残部入冊の際、小生購入出来候もの」として二三の落札書名を記す(「書物往来」5、大13)。これら一三点と、永田旧蔵印を有する忍頂寺文庫現蔵の八点とは重ならないが、いずれも売却分の購入か(後述《参考》欄、永田旧蔵「ゑにし染」の例もあり)。大正一二年の大震災以降昭和二〇年代半ばまでは大口の売立が連立し、蒐書家にとって垂涎の時代であったといえる。折しも、務の壮年期にあたり、経済的余裕も存した時期と思われる。「潮来図誌」八円の即売会出品を聞いた務は「すぐに申込んだ」(竹山人「関西吟遊随筆三稿」「書物往来」12、大14)など、務の蔵書の一半が即売会・売立会を通じて蓄積されたことを示すエピソードであろう。先述の黒崎・石割蔵印以外では、石川巖の「耽奇郎文庫」印等、旧蔵者と務との直接的交誼を想定できる印記は比較的少ない。(青田)

◆蔵書印について(2) 忍頂寺文庫蔵本に捺されている種々の蔵書印の中には、綿屋文庫、洒竹文庫、知十文庫といった俳書中心の文庫のものもあり、俳諧研究者の目を引く。それらの文庫の書物は、現在は門外不出の貴重書である。それらと同じ印を持つ書物が、どういう経緯を経て忍頂寺文庫に入ったのか、興味深いものである。次に一考してみたい。

まず、「わたやのほん」(綿屋文庫の蔵書印)と「和露文庫」の蔵書印について。これは現在、綿屋文庫、和露文庫とも天理図書館綿屋文庫の蔵書となっている。綿屋文庫は、もとは天理教二代目真柱、中山正善の私的文庫であった。天理図書館に寄贈されたのは昭和二年である。

『鬼貫独吟百韻』(D30、半一、文筆編、安永八刊)は、序の丁表に「わたやのほん」の印をもち、裏表紙の見返しには綿屋文庫の「消印」が捺されている。この消印は、綿屋文庫の書物が外部に出される時に使われたものであった。ただし天理図書館の印はない。つまり同書は綿屋文庫が天理図書館に入る前に務の手に渡ったものと推定される。正式に同図書館に入ってから、綿屋文庫の書物が外部に出ることはなかったが、中山家の蔵書であった時には、図書を管理する執事の判断で、人に譲ったり交換したり、ということがあった。また綿屋文庫が天理図書館に入った後も、同文庫に蔵書が加えられる場合は、まず中山家に入り、中山家の寄贈という手続きをとっていたようである。

「吉原細見」の項で述べられているように、務は、蔵書であった吉原細見を多数天理図書館へ寄贈している。逆に天理図書館から書物が出されることはなかったが、『鬼貫独吟百韻』は図書館に入れ

る以前のものを譲渡されたのであろう。同書は、現在の綿屋文庫に版本が一点、写本が一点あり、重複するため外部に出たのであろう。務にしてみれば、米山とのかかわりもしくは、兵庫伊丹の俳人、鬼貫の独吟ということで関心のある書物であったと思われる。

『賢翁品』（D3、折一、如儒編、安政六序）は蕉門曾良の百五十回忌追善集で、折本仕立ての洒落た一冊である。これの二丁表に「和露文庫」の蔵書印がある。和露文庫は、俳人、川西和露（明治八〇昭和二〇）が大正から昭和にかけて蒐集した俳書である。また同書には「鬼貫独吟百韻」と同じく綿屋文庫の「消印」が捺されており、綿屋文庫から出された書物とわかるのである。ただし「わたやのほん」の印はない。これはいったん和露文庫として中山家が入手したが、正式に綿屋文庫（当時はすでに天理図書館蔵）に入られる前に、消印を捺して務に譲られた可能性が高い。同書は版本がもう一点和露文庫にあり、そちらが綿屋文庫に入っている。

しかし綿屋文庫から和露に譲られ、その後務が入手した可能性もある。和露の重複本が入札に付されたこともあるし（『典籍之研究』六によると大正一五年一二月のこと）、和露は務と同じく神戸住であったので、両者の個人的なつながりも考えられるのである。もちろん、綿屋文庫、和露文庫、忍頂寺文庫の間に第三者が入ってこの『賢翁品』が巡ったということも大いにありうる。

西竹文庫、知十文庫は、現在東大図書館に入っている、連歌・俳諧を中心とするコレクションである。西竹文庫の書物は、俳人、大野西竹（明治五〇大正二）蒐集の俳書等で、大正三年に西竹が没し、同五年に東大国文学研究室が購入、その後図書館の竣工をまつてこちらへ移管された。知十文庫は、これも俳人の岡野知十（万延元〇

昭和七）の蔵書であった。東大図書館に寄贈されたのは昭和八年である。

『里の花燈籠』（C21、小一、朋誠堂喜三編）は江戸中期の狂歌本で、序の一丁表に「西竹文庫」の蔵書印が捺され、さらにその下に「斎藤文庫」の蔵書印がある。東大図書館の印はない。「斎藤文庫」は、俳人で雪中庵九世であった斎藤雀志（嘉永四〇明治四一）の蔵書印。彼も著名な蔵書家で、没後、蔵書の多くは西竹文庫に入った。つまり、この書は斎藤文庫から西竹文庫へ、そして忍頂寺文庫へと移ったものである。この書にある「西竹文庫」の印は、西竹没後、蔵書を売る際に捺されたものだという（反町茂雄「明治の大蒐集家 大野西竹」『蒐集家 業界 業界人』）。その時、俳書は大へ入ったが、それ以外は書肆に任せられ、個人に売られたり、入札に付されたりしたようだ（同）。これもそうして個人の手に渡った西竹の蔵書であったのだろう。ちなみに同書は、『国書総目録』でみるかぎり、天下の孤本である。

最後に「知十」の蔵書印は、『毛登濃美津』（D13、半一、雪斎編、宝暦九刊）や『（新吉原細見）』（F38、外題・内題なし、日本書誌学大系72『吉原細見年表』の仮称にしたがう、蔦屋重三郎板、寛政六序）等に捺されている。岡野知十は北海道出身の俳人、東京に出て活躍し、昭和七年東京で没した。没した翌年に、彼の蔵書のうち四五四冊が東大図書館に寄贈された。『毛登濃美津』も、『新吉原細見』も東大図書館の印はない。知十は、晩年は俳句だけでなく小唄の創作にも興味を抱いており、湯朝竹山人を通じて歌謡研究家の務と知り合ったらしい（竹山人「忘れ唱歌の記事と私の因縁」『書物往来』一四）。つまりこの二つの書は、知十生前に直接本人

から務に譲られたものと思われる。

『毛登濃美津』は、江戸座の乾什追善集。忍頂寺文庫の俳書の数は多くはないが、務は、祇徳や二世湖十、乾什等、役者と交流のあった俳人関係の俳書を意識的に集めているようだ。これもそのうちの一冊としてよいであろう。

吉原細見については、本特輯「吉原細見」の項に詳しい。この『(新吉原細見)』は、務が天理図書館に吉原細見を寄贈する際、同図書館で重複するので手元に残したものである。

以上、川西和露、大野西竹、斎藤雀志、岡野知十らは皆俳人だが、書物の蒐集家であるということで、務と共通している。直接にあるいは書物を通じて、これらの人たちの文庫と忍頂寺文庫の間に交流があったというのは興味深いものである。

〈富田〉

◆『都々一評判記』(G 206) 中本一冊。表紙は愛らしい色刷りで「よしこの集」とある。見返しは「見立都々一」、内題は「都々一評判記」。序に「永七の虎四序」とあるので嘉永七年(甲寅)四月の刊行であろう。

務氏の本領は歌謡研究や風俗考証のみではない。上方の趣味人が往々にしてそうであるように、彼もまた赤い灯青い灯に心浮き立つ食道楽家でもあった。本書はその務氏の一面を如実に物語るものである。すなわち、嘉永七年における大阪の料理屋を都々一で評判した書で、食い倒れの街を闊歩した歌謡愛好家の本領を見ることが出来る。務氏が桜橋のとある腰掛料理で一杯呑んだほろ酔い気分に入手され、雑誌「郷土趣味大阪人」(昭和四年十一月)に寄稿された。いわく、「料理は舌の藝術、其土地其文化を計る尺度である」と。

本書に載る料理屋は百十軒、例えば老舗西照庵は「古い御席で一ばんよいがやぶでみはらしないわいな」とあるように、各店が都々一で評され、幕末の大阪料理屋が一覧できる貴重な文献である。ちなみに、務氏の論考は後に改題され、文章にも手を加えられて「町人文化百科論集」四巻に再録され、ままこれによって引用されるが、務氏の本領は原論考によってこそ味わうことができる。

〈福田〉

四、『淡路詞』翻刻・解題

書誌

「体裁」写本一冊。袋綴。縦十七・九釐×横十三・三釐。水浅葱色表紙。墨付十一丁。「外題」表紙中央に「淡路詞（印）全」と墨書した題簽貼付。「内題」淡路詞「印記」題簽に朱印（象と壺を組み合わせた絵印）、内題下に「静村文庫」、十一ウ末尾に「野村」

「良蘭」の各方形朱印。「備考」一オから五ウまでは、「見出し語センボウ」という形が行をなし、原則として半丁につき十語の見出し語（主として人形浄瑠璃の興行に関わる語）を記す。六オからは、「見出し語 センボウ」の記載が二段組になり、一段につき八語、つまり半丁あたり十六語の見出し語（一般語）を記す。

解題

一

『淡路詞』（H26）は、忍頂寺文庫の他、頼原文庫に写本一冊が所蔵される。頼原文庫本には、「昭和十八年五月十七日頼原謙三写／時年八十」（墨書）と頼原退蔵の父謙三の識語があり、その右横に退蔵が「忍頂寺氏蔵本ニヨリ写畢」と墨書している。退蔵には、式亭三馬の著作にみえるセンボウについて触れた「三馬雜記」（『書物札讀』第四号）などの研究があり、センボウに対する関心から、務より『淡路詞』を借り、謙三が書写したのであろう。また、『淡路の人形座』（『大阪朝日新聞』大正14・5）などの研究が備わる三田村鳶魚も、それに先立つ昭和十一年十月四日に、務から他書と共に

に『淡路詞』を借り、「淡路詞は直に写し」と日記に記す（『三田村鳶魚全集』第十七巻）。『淡路詞』は、このように、頼原退蔵や三田村鳶魚が関心を寄せていた書であった。しかし、本書を十分に検討利用した研究は未だ少ないといえる。たとえば、前田勇「阿波のセンボウ―附、女義センボウ」（『大阪学芸大学紀要 A 人文科学』第六号、昭和32・3）、同「近世上方語考」（杉本書店、昭和32・8）などセンボウの代表的研究においても、本書については触れられていない。一方、島田勇雄は、「近世後期の上方語」（『国語と国文学』昭和34・10）、及び「人形座の隠語―せんぼー」（『国語と国文学』昭和60・5）において、センボウをのせた近世後期の上方の資料として、本書の名をあげている。にもかかわらず、淡路人形座のセンボウについて詳しく論じた島田の「人形座の隠語（一）」（『六』）（『水門―言葉と歴史』創刊号／第八号、昭和38・7／昭和41・5）では、本書が一切利用されていない。他に、中村幸彦「深川通言と上方語」（『語文』第二十二輯、昭和49・9）でも、本書に若干触れられ、『角川古語大辞典』（昭和57・6）において、いくつかのセンボウの用例に本書が利用されている。それ以上の本書の資料性の検討、センボウや淡路人形座の研究における利用は今後の課題といえよう。

『淡路詞』の書写年代や、印記にみえる野村良蘭については不明である。ただし、題名に「淡路」と冠しているところから、本書（またはその祖本）が、淡路人形座ゆかりの地で作られたと考えることは許されよう。本書のようにセンボウのみを大量に集成する態度は、従来のセンボウ研究において紹介された近世期の他の資料には殆ど見出せない。『淡路詞』は、いわば淡路人形座のセンボウ辞

書のようなものを意図して作られたのではなからうか。なお、本書は墨付きも美麗な、枳形本に近い体裁の美本である。淡路人形座のセンボウ辞書を意図した本書が、美本に仕立てられたことの意味も今後考えていくべきであろう。ともあれ、本書が、故郷淡路と近世芸能を終生愛し、淡路人形浄瑠璃にも親しく触れたと目される務が賞玩した一書であることは確実だと思われる。

二

センボウは前節の通り、これまで主に前田勇、島田勇雄らによって整理、紹介されてきた。『淡路詞』所収のセンボウも、多くは先学が指摘するものと重なるのだが、一方で、未だ紹介されていないセンボウや、語形は同じで用法の異なるセンボウなども見られる。

例えば「てうけい」は、従来〈後家〉及び〈煙管・煙草盆〉のセンボウとされてきた。^(註)『淡路詞』でも「後家は てうけい」(「一オ上段」とある。しかし〈煙管・煙草盆〉は「きせる 孫右衛門てうけい、たばこぼん 同」(「八オ上段」となっている。「孫右衛門」は〈煙草〉のセンボウである。本書には「茶わん たらこてうけい」(七ウ下段)、「てうし せいぎてうけい、さかつき 同、膳わん さいこうてうけい、めしつき 同」(「八オ上段」という例もあり、「たらこ、せいぎ、さいこう」がそれぞれ〈水・茶、酒、飯〉のセンボウであることから、これらの「てうけい」は、上接する事物のための〈器・道具〉を意味するものと考えられる。このような〈器・道具〉の意の「てうけい」例の存在は、元来〈器・道具〉一般を広く意味していた「てうけい」が、後に〈煙管・煙草盆〉にのみ特用いられるようになり、用法が限定されていったという変遷を窺わせる。と同時に、『淡路詞』にセンボウのより古い用法が残存し

た例とも考えられ、本書の資料性との関連で注目される。

さらに『淡路詞』の五ウには「太夫 ゆた左衛門」「座元 ゆた元」と、〈太夫〉のセンボウに「ゆた」の語形が見られる。従来〈太夫〉のセンボウとしては「いたざえもん」という語が知られていた。前田勇は、この「いた」を〈板〉と解釈し、舞台の板張りに由来するセンボウかもしれないと述べた(『近世上方語考』三二頁)。だが、先の「てうけい」での考察を参考にすると、「ゆた」の方がより古い形で、「いた」はそれが音韻変化したものという可能性もある。そして、そのように考えると「ゆた」は「たゆう(太夫)」の転倒した形と捉えられ、語源解釈もより自然になるのである。

『淡路詞』には、ほかにも〈粥〉のセンボウ「とろけ」が、カユーカヤという音の近似から「蚊屋 まとろけ、紙帳 とんびとろけ」(「一ウ上段」と〈蚊帳〉の意に転用された例など、従来知られていない、独自の用法をもつセンボウが散見される。センボウ研究の上で本書が有する価値は高いと言えよう。『淡路詞』の資料性についても、それらセンボウの個別的考察を積み重ねながら、さらに考究してゆくことが必要である。今後の活用が望まれる一書である。

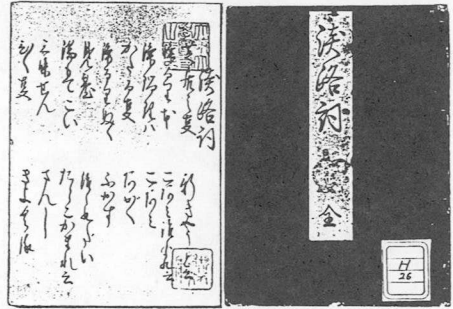
(注) 管見の限りでは、『日本国語大辞典』にのみ「①茶碗・鉢・桶などすべて容器をいう。」との記述があったが、実例の紹介はない。(内田)

凡例

○表記はできる限り底本に従ったが、異体字は通行のものに改めた。

○丁移り、並びに、段移りは「」で示した。

○本書には差別的用語が含まれるが、歴史的資料であることを鑑み、原文のままとした。



翻刻

淡路詞

芝居之事 新きやうと云
 浄るり本 こあみ治郎九云
 浄瑠理は こあみ
 かたる事 あがく
 浄るりぬく ふかす
 見臺 治郎九だい
 湯もてこい たらこかまれ云
 三味せん さんし
 ひく事 きよくる
 ばち之事 きよくりと云

「(一オ)

こま さんしまくら
 糸 つる
 ゆか こあみしんか
 した手すり けにまわし
 人形 げに
 男人形 しんでん
 女人形 やんま
 大將人形 ぐんしやう
 内裏帝 にちりんまつ
 公家 こうしん
 きさき しんでんげに
 立役人形 太郎げに
 ちやり ちば
 ぢゞ しんは
 ばゞ おゆきしんでん
 奴 おゆき
 こし元 しゆみけん
 かしら とんひ
 かみ ゆうはまつる
 さかやきみがく」
 「(二オ)

みゝ 新兵衛
 手 ゑんかう
 足 そく
 顔 おかの四郎
 着物 むき
 ひたたれ
 すわう
 上下 しぶむき
 はかま まむき
 小袖 はつひ
 羽織 たらこむき
 合羽 たりむき
 布子 せはむき
 あわせ 平生じむき
 ひとへ物 たしむき
 地半 ぐる
 帯 やまと
 下帯
 もゝ引
 足袋 そくむき
 扇 〔かぜこ
 せん竹
 ふうは
 うちわ
 しやく
 「(三オ)

「(二ウ)

ばくち打	きんとう兵衛	宮	しのきしんか	あんどう	にちれんしんか
さん置	彦次郎	人家	しんか	てうちん	同
びんぼう	もんじき	武具	よろひ	油は	さぶ
こつじき	たかせる	かぶと	てつほう	門	「(八才下段)」
めんは	五郎三	碁ばん	鍋釜	儒	
もろう事	ろはまはし	物を煮	茶釜	天人	
機多	しんぞう坊	茶碗	茶わん	天狗	
馬かた	与茂治郎	うげんち	「(七才上段)」	ばけ物	
舟道	やんま	七兵衛	てうし	正身の者	
川	しのきたれ	膳わん	さかづき	喰事	
女郎	源四郎	めしつぎ	同	酒	清三郎
かげま	つばさやんま	たばこ	せいざてうけい	飯	「(八才上段)」
しり	たかきは○かたま	きせる	「(七才下段)」	汁	さいこう
びくに	やすきは○すやい	たばこぼん	同	坪平	じんたい
ぬす人	ゑ吉	火ばち	孫右衛門	何もなきは	何もならび
女郎屋	五郎太	たんす	孫右衛門てうけい	魚	墨幕
夜たか	あるき	長もち	同	鯉は	たつほ
舟万中	かみゆい	持佛	「(八才上段)」	四足は	ろいたつほ
直段	ひつじまつり	たゝみ	やきものは	うまひは	つばさたつほ
座頭			うどん	そうめん	四ツたつほ
名主				うどん	「(八才下段)」
あるき					惣じてくしや
かみゆい					むくとい
堂					

冷麦	咄しするは	四郎左衛門しこらへた	米	ざね
蕎麦	けいはく云	三郎兵へあがく	金	げんとか
まんぢう	うろたへる事	とちり	銀	白げんとか
たんこ	ゑんぶ	みか	銭	新太郎
もち	てんだい	がひ	百文	新太壱てん
菓子	ちやご	田舎	壱文	新太ひろと
水くわし	丸かせ	山家	はながみ	とんび
塩	中しやう	上手	兄	みかねき
味噌	(しんだい 三年)	下手	弟	つこてき
醬油	塩だらこ	利口者	一門一家	もんち
貸 _レ	まかす	とんな者	はやく	やほく
借り	まかり	すひな者	物買は	まう
行事	かまる	すきな者	近道	がちか
帰 _ル 事	ふける	かさかきは	遠道	とふほうじ
ねる事	せぶる	ひぜんは	後家は	てうけい
おきる事		しやらくさい	出来た	よりまた
遊ぶ事	善五郎	じまん	なく事	こたれる
休む事	きたなこ	はぢをかく	親の事	申と云
人の気	ぜめ	酒に酔	かくせ	むくせ
自分の事	どうじく	のみ	たゝく事	新兵衛する
貴様と云事	よたろ共	しらみ	切 _ル 事	わきする
うそを云	源四郎あがき	たきゞ	いたい事	きよふし
まことを云	しんけんあがき	つけ木	むたいな事	きよふじん
			こわい事	はんこうぼう
			さたない事	しやむ太郎

けちな事

喜助

悪口さしあい

喜助あがくなと云

雨降事

たらしひつく

明日の事

しやた

くるしいと

せくちい

せつないと

てこ

すくないは

やつかいにぜける

たんと有

まところけ

蚊屋

とんびとろけ

紙帳

そりひい

ひだるいは

そきた

勝た事

そきた

負た事

げまん

そんな事

りします

しつた事

りします

しらぬ事

れき

当座居

れき

村野
蘭良

〈内田・正木〉

〈参考〉忍頂寺文庫旧蔵遊女評判記二点

新編稀書複製会叢書『遊女評判記・花街本』所収の『吉原下職原』（原本複製一丁表より最終丁裏）は、その解説末尾に「原本、東京、忍頂寺務氏蔵」とあり、務の家蔵本を底本としていることがわかる。また、近世文学資料類従『遊女評判記集（中）』に影印された赤木文庫蔵本『吉原下職原』表紙見返しには、「忍頂寺蔵書章」の印記が確認できる。二書の影印が欠丁箇所を同じくすることから、これらの底本は務旧蔵の同一書であると思われる。さらに、近世文学資料類従『遊女評判記集（上）』所収の、赤木文庫蔵本を底本とした『ゑにし染』（五巻五冊）にも、同前の務旧蔵印がみえる。『吉原下職原』、『ゑにし染』ともに忍頂寺文庫には現蔵されておらず、赤木文庫へ流出したものと考えられる。

務は「花街本に就て（二）」（『書物往来』13）で「ゑにし染」に言及し、「家蔵のものは永田文庫本で」巻五を欠くという。大正十一年の永田旧蔵本入札目録（みをつくし）2）にも「ゑにし染 四」とあり、確かに、資料類従影印では巻一、四の各一丁表に務の蔵書印と「永田文庫」印が捺されている。巻五印記は「アカキ」「よこ山」のみで、務旧蔵本との取り合わせ本である。また『吉原下職原』収蔵の経緯に関しては、次の如き逸話が存する。

この紙屑から出た珍書も沢山ある。神戸の蔵書家忍頂寺静村氏が取得した『吉原下職原』、東京の某氏の『吉原鑑』などが、すなわちそれである。自分の所蔵の中にも、屑屋の籠から出たのが、数種あります。（三田村篤魚「屑屋さんの話」昭14）

『吉原下職原』を「蒐集し得た」のは、務上京中の昭和十一年のことという（務「一中節稀観本」『陳書』6）。なお、翌年一月二十八日から二月十六日にかけて「下職原のうつけ」を、五月五日には『吉原下職原』を務より借覧した旨が、篤魚の日記に記されている。

務「ほかのひんと」（『古本屋』7）には、川島禾舟が「或本屋の古反故の中から吉原の珍書『よぶこ鳥』を発見した」ことに触れて、「小さな物ならば随時随処に」「反古の中から出現する」とある。『吉原下職原』以外にも、如上のルートで珍書を取得した例があったと推察される。「反故と見做されて屑屋にでも売却はれたらしい」書物を「所謂『せどり』」に命じて集められたらしい」と、永田有翠の蒐集熱を追懐する幸田成友の言（「下萌」6、大10）を勘案すれば、当時の蒐書家と務の動向は軌を一にするものといえよう。

〈青田〉

五、忍頂寺務氏著述目録

凡例 執筆題目（角書へ）、①誌名・巻号、②発行年月、③備考の順に並べた。猶、当該著述が後に「清元研究」に所収されたものにはA、「近代歌謡考説」にはB、「訪書雜録」にはCを付し（括弧内は改題名）、再録時の増補改訂は特に断つていない。〈近衛〉

『北州千歳寿』の作曲年代①大江戸之研究延寿清話（以下、延寿清

話と略）1②大13・3③A

三浦屋と其歿落年代

①延寿清話1②大13・3③A

八朔の白無垢と夕霧

①延寿清話1②大13・3③A

毛利元義公の狂歌

①延寿清話2②大13・4③A

八朔の白無垢と夕霧（続き）①延寿清話2②大13・4③A

清元「梅の春」の作曲年代①延寿清話2②大13・4③A

三浦屋薄雲年代記

①延寿清話2②大13・4③A

元祖都太夫一中の生处

①延寿清話3②大13・6

清元「卯の花」の作曲年代①延寿清話3②大13・6

三浦屋揚巻と助六狂言

①延寿清話3②大13・6③A

睡餘小録と来山翁の人形

①延寿清話3②大13・6③A

諸家来信

①書物往来2②大13・6

読者通信

①書物往来3②大13・7

「鬼桃太郎」序文判読懸賞募集願末（一部）

①書物往来3②大13・7

俳人瀧野瓢水に就て

①延寿清話4②大13・10

清元「小糸」の作曲年代

①延寿清話4②大13・10③A

市川家の三升の紋所

①延寿清話4②大13・10③A

加保茶と「柳巷名物誌」

①延寿清話4②大13・10③A

「大江戸研究」の著者より①書物往来5②大13・11

俳人惟然并慶庵の遺跡

①延寿清話5②大13・12

清元「雲助」の作曲年代

①延寿清話5②大13・12③A

扇屋墨河と遊女花扇

①延寿清話5②大13・12③A

八世団十郎死出の旅

①延寿清話5②大13・12③C（夜雨庵の

旅）

諸家来信抄3

①書物往来6②大14・1

諸家来信抄四

①書物往来7②大14・3

友志互見

①延寿清話6②大14・3

清元「乗合盆」の作曲年代①延寿清話6②大14・3

富本延寿略年表

①延寿清話6②大14・3③A

服部嵐雪の故郷

①延寿清話7②大14・4

初世延寿太夫略年表

①延寿清話7②大14・4③A

清元の「文屋」と「喜撰」

①延寿清話7②大14・4

醉餘小言

①延寿清話7②大14・4

書物往来

①書物往来9②大14・5

山口泉処の邸に就て

①延寿清話8②大14・7

二世延寿太夫略年表

①延寿清話8②大14・7③A

宵楼三つ布団

①延寿清話8②大14・7③A

醉餘小言（二）

①延寿清話8②大14・7

吉原細見記

①書物往来10②大14・7

「梅の春」註釈

①清元研究1②大14・7③A

上方の洒落本に就て

『保名』註釈

- ①書物往来11②大14・8
- ①清元研究2②大14・8③深川櫻及兼樹振。A

花街本に就て

- ①書物往来12②大14・9③C（五大力菩薩手鑑・一部）

『神田祭』註釈

- ①清元研究3②大14・9③メ能色相図。A

三世延寿太夫略年譜

蘭州の代々

花街本に就て（二）

『玉屋』註釈

- ①延寿清話9②大14・10③A
- ①延寿清話9②大14・10③A
- ①書物往来13②大14・10
- ①清元研究4②大14・10③おどけ俄煮珠取。A

『お染』註釈

- ①清元研究5②大14・11③道行浮塙鷗。A

上方の洒落本に就て（二）

『鳥羽絵』註釈

- ①書物往来14②大14・12
- ①清元研究6②大14・12③御名残押絵交張。A

『梅の春』原刻本の発見に就て（高野博士推定説の誤りを糾す）

- ①書物往来15②大15・1③A

前冊「懷古造紙」補遺の又補遺

- ①書物往来15②大15・1

『梅の春』に就て

- ①清元研究7②大15・1③淡路島守号。A

『北州』註釈

- ①清元研究7②大15・1③北州千歳寿。A

芝居晴小袖

夜雨ぬるたま草紙

『傀儡師』註釈

- ①典籍之研究4②大15・1
- ①書物往来16②大15・2
- ①清元研究8②大15・2③復新三組箋。A

四世延寿太夫略年譜

丁字屋雛鶴年代記

『萍華謾筆』に就て

『三社祭』註釈

- ①延寿清話10②大15・3③A
- ①延寿清話10②大15・3③A
- ①書物往来17②大15・3
- ①清元研究9②大15・3③弥生花浅草祭。A

『卯の花』註釈

- ①清元研究10②大15・4③賑民寿万歳。A

『おはん』註釈

- ①清元研究11②大15・5③道行思案餘。A

『喜撰』註釈

- ①清元研究12②大15・6③六歌仙容彩。A

延寿清話

『山婦り』註釈

- ①サンデー毎日②大15・7・18号
- ①清元研究13②大15・7③山婦強桔梗。A

小紫年代記

雁来紅友

酒のお江戸

『吉原雀』註釈

- ①延寿清話11②大15③A
- ①延寿清話11②大15
- ①慧星 江戸生活研究（以下、慧星と略）1・6②大15・8③C（江戸の酒）
- ①清元研究14②大15・8③僅花手向橘。A

『玉兔』註釈

- ①清元研究15②大15・9③玉兔月影勝。A

〈鯨公必要〉 猫名本

A

①東京新誌（書物往來の改題）1・2②
大15・9

『文屋』の註釈

A

①清元研究16②大15・10③六歌仙容彩。

〈洒落本研究〉 粹好伝夢枕①裸放江戸時代1・1②大15・10③淡路

島守号。C（「粹好伝夢枕」と兵庫の遊里）

歌詞註釈補遺『槍ぶすま』

①清元研究17②大15・11③清元研究16号の補遺。

〈洒落本研究（二）〉 原柳巷花語

①裸放江戸時代1・2②大15・11

『種時三葉艸』註釈

①清元研究18②大15・12③再春松種時。

『双六』註釈

①清元研究19②昭2・1③青楼春道中雙六。A

〈洒落本研究（三）〉 通客一盃記言

①裸放江戸時代2・1②昭2・1③淡路島守号。

『夕ぎり』註釈

①清元研究20②昭2・2③春夜障子梅。

『三千歳』打明話

『三千歳』註釈

①サンデー毎日②昭2・3・13号

①清元研究21②昭2・3③忍逢春雪解。

春興二笑

江戸読本2・6（昭14・5）再録

①東京新誌1・5②昭2・3③C（花櫻

田春・一部）

〈洒落本研究（其四）〉 京伝居士談

①裸放江戸時代2・3②昭2・3③淡路島守号。

梅の春考

三升紋の新考察

「煙花小筆」と「江戸堅木難波梅」に就て 付たり三代梅暮里谷峨

問題（私信往來）

西鶴対問

西鶴対問

清元の文屋

「女鬼産」

ふるほにや、にさつかへや物語

①古本屋5②昭3・5③C（月花餘情・

一部）

潮来節の文獻と「笑本板古猫」

①書物の趣味3②昭3・12③B（潮来節に就て一、江戸の潮来）

ほぐのひんと

吉原太夫の終り

①古本屋7②昭4・3

①慧星4・10②昭4・10

上方の潮来節に就て

①（郷土趣味）大阪人3②昭4・11

潮来わすれ草

①演藝月刊6②昭4・11③B（潮来節に就て二、上方の潮来）

①文獻志林3②昭4・12

「吉原よぶこ鳥」の発見 ①赤本屋1②昭5・1③C

役者本の紹介 ①文献志林4②昭5・6③C(猿の毛衣)

「川口おなを」に對する質疑

①文献志林4②昭5・6

清元研究(A) ②昭5③春陽堂刊

〈東山繪巻その二〉二けん茶屋

①上方1②昭6・1③C

〈東山繪巻その二〉河東の女

①上方2②昭6・2③C

伊勢音頭に就て

①本道楽11③昭6・7

都踊くどき

①陳書1②昭6・8

〈新改〉吉原細見花車

①陳書1②昭6・8

兵庫節に就て

①陳書1②昭6・8

「お染久松」めづくし

ゑびや節に就て

①上方9②昭6・9③C(ゑびや節に就て)

七代目団十郎の配り本

①書物展望1④昭6・10③C

大津絵「上方」見物

①上方12②昭6・12③B(大津絵節に就て)

上方役者ほめ詞

①上方13②昭7・1③C

いとなみ六ほう

①陳書2②昭7・1③C

味噌屋板の「兵庫節」に就て

①書物の趣味7②昭7・3③B

尾州藩御船唄集

①陳書3②昭7・7

大阪に於ける兵庫口説に就て

①上方20②昭7・8③B

心中口説き二十種

②昭7・12頃か?③鳶魚日記・上方32号

扇港煙華細見

「寄贈新刊書紹介」に依る。

心中くどき(1~5)

①上方28②昭8・4③淡路島守号。C

ざくろ天神、おぐりてててゆめ物語、さくらひめ

②昭8・8③昭13・5③天理圖書館蔵自筆稿本

潮来舟

朱雀遠目鏡跡追

蝶衣の幼きころ

一中節稀観本

八日目華

伊勢音頭に就て

瓦版のいたこ唄本に就て

巻頭言

色山解深川(上)

色山解深川(下)

江戸図彙猪牙舟

正徳四年一中節正本

音曲びんがてう

忍逢春雪解

①陳書4②昭9・2③C

②昭9・9頃か?③鳶魚日記に依る。

①陳書5②昭10・1③C

①ひむろ117②昭11・2③C

①陳書6②昭11・4③新道行摘・千朴秘曲集。B

①陳書7②昭11・12③C

①陳書8②昭12・9③B

①陳書9②昭13・5③B(潮来節の瓦版に就て)

①江戸読本1⑥昭13・11

①江戸読本2②昭14・2

①江戸読本2③昭14・3

①江戸読本2④昭14・4

①陳書10②昭14・4③B(一中節稀観本)

①陳書10②昭14・4③B

①江戸読本2⑥昭14・5③清元研究

21号所収。

法花歌だいこ

『へしもふさ』身旅喰

江戸図彙 都々一坊扇

江戸図彙 お茶を挽く

道行旅路の嫁入(上)

道行旅路の嫁入(下)

歌へすく餘波大津繪

江戸図彙 吉原の松飾り

色増艶夕映

〈歳旦〉豊春名集寿(上)

〈歳旦〉豊春名集寿(下)

紅蘭未亡人の書簡

柏木遊泉とその子孫

へしん板小哥揃 音曲浮名笠

竹外と雲如

一中節稀観本

頼三樹三郎の書簡

訪書雜録(C)

一中節の古板本に就て

竹婦人吳丈に就て

近代歌謡考説(B)

よしこの節

東海道宿屋漫考

都羅くどき

九十三年の狂歌友交記録

初代団十郎殺し

都々一節文獻

伊勢音頭の曲名

越後口説

よしこの節

どといつ節

①金曜1-1(へちま文庫1) ②昭24・1

①金曜1-6(へちま文庫6) ②昭24・6

①金曜2-11(へちま文庫13) ②昭25・2

①金曜2-11(へちま文庫23) ②昭25・12

③柏木遊泉とその子孫について。

①金曜3-1(へちま文庫25) ②昭26・2

①金曜3-4(へちま文庫28) ②昭26・5

①金曜3-7(へちま文庫31) ②昭26・8

①金曜3-9(へちま文庫33) ②昭26・10

②年次未詳③忍頂寺文庫蔵自筆稿本(G)

109

②年次未詳③忍頂寺文庫蔵自筆稿本(G)

109